

## 壮族の歴史起源と文化 (翻訳『壮学叢書・総序』)

首席編輯者・張声震  
翻訳：項 青

### 【訳者前書き】

1999年に着手された壮学叢書シリーズ（広西民族出版社）の総序の一部を翻訳した。壮学叢書の総責任者は広西壮族自治区の副主席で、壮族出身、壮・タイ語の研究者張声震氏（故人）である。張氏は1985年政界から引退したのち、中国西南民族研究学会や広西壮学会の名誉会長に就任し、西南部や広西壮族自治区の少数民族文化を救うために尽力した。それらの文化遺産を熱心に蒐集・整理し、研究を行った。そして『古壮字字典』、『広西壮語地名選集』、『壮族通史』、『壮族民歌古籍集成』等、数十巻にわたる壮学叢書を出版した。

その主なものは『壮・タイ民族伝統文化の比較研究』、『壮族の自然崇拜』、『壮族の銅鼓研究』、『壮族のトーテム考』、『壮・侗族の民族建築文化』、『師公・儀式・信仰——壮族民間師公教の研究』、『中国壮族葉草学』、『壮族麼經布洛陀影印訳注』、『壮族神話集成』である。

『壮族神話集成』（広西民族出版社 2006年2月）の出版編著の首席編集長・農冠品氏は同じく壮族出身の研究者であり、中国民間文藝家協会の副主席、広西壮族自治区文学芸術界連合会元専門職副主席でもある。『中国民間文学集成・広西篇』、『中国歌謡集成・広西巻』、『中国故事集成・広西巻』、『布洛陀經詩訳注壮族史詩』、『壮族長歌・嘹歌』、『瑶族史詩古籍版』等の編輯作業に参加し、首席副編集長と主任研究員としての力量を遺憾なく発揮した。また少数民族文化を守るために働き、国や自治区からも数々の賞を贈られた。

『壮族神話集成』及びそれに関する研究論文の翻訳は、四・五年前から項青と田畑博子（中国曲阜師範大学翻訳学院日語教師・文学博士（民俗学））の二人が着手しはじめた。しかし膨大な量であるので遅々として進まずにいたが、少しでも日本の研究者の方々にお読みいただけたらと、今回はまず壯学叢書シリーズの総序の翻訳を行った。長文のため、二回に分けて掲載する。

壮族については、55ある中国少数民族の最大民族であるにも関わらず、日本への紹介が進んでいない。日本の稲作文化を考えると、中国南方に位置する壮族自治区の文化に触れないわけにはいかない。しかし日本では、ここに書かれた「那文化」に関する論文や資料を目にすることは少ない。そこで項青、田畑の二人が、2014年に南寧訪問を機に翻訳を始めた。日本の奄美・沖縄とこの広西壮族の民俗の共通性は多い。本論には、焼き畑耕作、段々畑、祭事に犠牲を捧げる、高頂草屋（高い藁葺き屋根の家）に住む、樹皮で作った服、綿の栽培、綿のフランネル（色彩のある綿のフランネル）を織る、ふちのない帽子、櫛をさす、刺青、火縄、火起し管、祭祀を重視する、祖先崇拜、多くの靈魂、龍船、お歯黒、鼻笛、貫頭衣、月夜の逢引、父の一字をとって子の名をつける、長い杵、二階建ての住居、藍染、岩葬、甕葬などが挙げられている。これらは日本の奄美・沖縄と共通する事項である。中国にある膨大な資料のひと握りを二人で翻訳することで、みなさまのお役に立つことができれば幸いである。

※なお本文における注釈は、全部訳者によるものである。

[項 青<sup>[1]</sup>]

## 壮族の歴史起源と文化

### 第一章 壮族の歴史起源

2001年の統計によると、壮族の人口は1700万人以上である。現在中国の少数民族で一番多い民族である<sup>[2]</sup>。主な居住地は、東は広東省連山壮族瑤族自治県、

西は雲南省文山壮族苗族自治州、南は北部湾（トンキン湾<sup>[3]</sup>）、北は貴州省従江県、西南は中国とベトナムの国境に広がる広大な区域となっている。

壮族の歴史は古く、その起源は悠久である。2000年以上前の周代から壮族の祖先は甌鄧（おうとう）、桂国（けいこく）、損子（そんじ）、産里（さんり）、九菌（きゅうきん）などの名前を持ち、それらは古い文献に見られる。秦漢から隋唐までは、西甌（せいおう）、駱越（えつらく）、烏滸（うこ）、俚（り）、僚（りゃん）などの名で呼ばれていた。宋代になって初めて一部の地域において「撞（ちゅあん）<sup>[4]</sup>」、「僮（ちゅあん）<sup>[5]</sup>」と呼ばれるようになった。そして明代には「俚（りゃん）」という呼び方も現れた。これらの呼び方は、ほとんど当時の為政者によって、獸偏がつけられ差別されていた。1950年代以前の壮族は、民族自身の呼び方として布俚（ぶりゃん）、布依（ぶい）、布越（ぶゆえ）、布雅依（ぶやい）、布僚（ぶりゃん）、布儂（ぶのん）、布曼（ぶまん）、布傣（ぶたい）、布土（ぶとう）、布隴（ぶろん）、布沙（ぶしゃ）など20数種類を有していた。中華人民共和国成立後、調査統計により、またそれぞれの民族自らの意志に基づいて、「僮族」と統一されるようになったが、1965年に改めて今日の「壮族（チワン族）」となった。

古くから壮族及びその先祖は、華南地域の珠江流域<sup>[6]</sup>に生活した。この地域は地理上の独立文化圏となっており、西は雲貴高原と繋がり、北には五嶺山脈<sup>[7]</sup>が横たわり、中部には広西省と広東省の二つの丘陵が弧を描いて連なり、多くの山脈に囲まれている。山間部には多くの河川が流れており、南盤江、北盤江、紅水河、左江、右江、柳江、漓江、桂江、西江、並びに北江と合わせて、珠江水系と呼ばれている。珠江流域は、亜熱帯に属し、春は雨が多く、夏は気温が高く、雨季と暑さは同時にやってくる。それらは動植物の繁殖や生物の多様化に役立っている。そして人類の起源にも、注目すべき条件を提供していた。

考古学の発見によって、80万年以前、広西の百色盆地にはすでに古人類の活動があったことが分かった。彼らの製造したハンド・アックス<sup>[8]</sup>等は、大型石器として世界的に有名になった。近年の考古学の発掘によると、広東省曲江で見つかった「馬壩人<sup>[9]</sup>」の化石は、10万年前の旧石器時代中期の古人類である。

また柳江県新興農場の通天岩では、「柳江人」の化石、来賓県麒麟山では「麒麟山人<sup>[10]</sup>」の人骨も発見された。柳江人は5万年前、麒麟人は2、3万年前の旧石器時代後期の古人類である。また桂林市郊外の甑皮岩洞では、約1万年前の新石器時代早期の人骨や生活遺跡が発見された<sup>[11]</sup>。これらの人類の体質特徴からみると、前述した3つの遺跡の人種の特徴を受け継いでいる。またこの地域においてはすでに人類の生活が形成されていたことが分かる。1997年、中国社会科学院考古研究所は邕寧県頂嶺山遺跡<sup>[12]</sup>を発掘したが、この遺跡には第二と第三期の発掘が代表性を持つ故、考古学の文化遺跡命名の規則によって、南寧及びその付近の貝塚遺跡を中心に「頂嶺山文化」と命名された。年代は7000～8000年前で、新石器時代中期と定められた。これらの遺跡からは大量の石斧、石鑿、石錘、石製の網用錘等といった石器、または蚌貝製の刀や骨製の手斧等、更に釜・壺・鼎など陶器が出土した。同時に隆安、扶綏、南寧市郊外の地域で、今から5000年以上前の遺跡から大型の石鏟<sup>[13]</sup>が発掘された。その他大量の銅鼓、銅鉞、銅鐸、銅劍などの青銅器、及び斧、鋏、刀、劍、戈、矛、鏃、鏟、刮刀などの鉄製の道具が見つかった。これらの器具は2000年～3000年前のもので、鮮明に地域と民族の特色を持っている。体質人類学の研究によれば、桂林甑皮岩人の体質特徴は現在の華南珠江流域の壮族、侗族語の民族と近く、他の民族とは遙かに異なる特徴を持つ。更に甑皮岩洞穴遺跡とその他の多くの新石器時代人類遺跡の中で、大量の蹲った形や手と足を折り曲げた姿勢の屍体、いわゆる屈葬の葬法が発見されたが、これは今の壮族で行われている死者の骨を拾う風習（二次葬）とほぼ同じであった。これらは今日の壮族と、これらの古人類とが繋がっていることを示している。壮族は華南・珠江流域の先住民であり、これらの古人類（少なくともそのうちの一部）は彼らの祖先である。

壮族は三つの時代を経て発展した。第一期は、上古～春秋戦国時代の独自の発展時期、そして第二期は、漢以後から近代の中華民国時代までの中央政権の統治の下に、漢民族やその他の少数民族と混じり合って統合されていた時期。そして中華人民共和国成立後、今日の民族自治という時期である。

遙か遠く上古において、壮族の先祖は独自の発展段階にあった。その社会構造は、原始的な氏族集落社会から封建階級社会へと推移していく。大量の文化遺跡から、旧石器時代晩期に壮族の先祖がすでに石を使って道具を作り、狩猟採集をし、共同労働や共同分配の母系社会の集団生活を送っていたことがわかる。その後生産力の発展に従って、母系社会から次第に父系社会へと変わっていった。南寧、扶綏、隆安などの各地に出土した大型の石鏟、また桂西各地で出土した石戈、石矛、石鋤、石鎌などから当時の生産力の高まりが窺える。そして採集経済が次第に衰え、牧畜、農耕が生活の中心になってきたことも物語る。同時に生産過程において男性が労働の主役となり、男性崇拜のシンボルとして棒状の男根（石祖と陶祖等）が出現するが、これは壮族において約5000年前の新石器時代後期から父系氏族社会に突入したことを意味している。

約2500年前の春秋戦国時代、壮族は既に青銅器時代に入っていた。考古学者は灌陽、忻城、横県、平楽、恭城などの地で青銅器を発見したが、その中に民族の特徴を持つ銅鉞、銅鐘、銅剣などがあり、明らかに現地で生産されたことが分かる。これは当時の社会生産力が大きく発展していたことを意味し、原始社会が次第に解体し、壮族に「君」「将」といったリーダー格の人物など身分階級が現れ始める<sup>[14]</sup>。

秦の始皇帝が嶺南に兵を派遣した際、「西甌君」という君長は西甌人集団を率い、激しく抵抗した<sup>[15]</sup>。史料には「(秦軍)三年甲を解き弩も弛めず」「伏屍流血数十万」とあり、秦の主将の屠睢も戦場で命を落としたという。その後「西甌君」が死んだ後も、各地に散乱した西甌人は、再び「傑駿（英雄・豪傑ら）を将として置」き、紀元前214年に秦の軍隊に敗北するまで戦いを続けた。西甌人が長期的間戦闘を続け、十数万人の秦の軍隊に抵抗し続けたという史実は、彼らの生産力が既に一定のレベルにあり、かなり緻密な政治及び軍事組織を持つ準国家的な存在であったことを意味している。

秦は嶺南地域を併合し、多民族の統一国家となった。その後、歴代の中央政権は、壮族およびその先住民の生活地域に対して、それぞれの異なる政策を推進し

てきた。最初は秦から隋代までの郡・県劃一の時代、つまり奴隷制度の形成と発展の時期である。次は唐から五代までの間の羈縻制度<sup>[16]</sup>、いわゆる西南地域の蛮族に対してその風習に従って特別扱いをされた時代、つまり奴隷制度が衰退していく時期である。さらに宋から清代への土司制度時代<sup>[17]</sup>は、政府から西南諸民族に対してその酋長を世襲できるように、また自らをその土地と人民を領掌する長官とする制度、いわゆる封建領主制度の時期となる。その後清代の中葉から中華民国時代は、資本主義列強の侵入と新・旧桂系軍閥時代<sup>[18]</sup>の半植民地半封建社会の時期である。最後は中華人民共和国成立後、民族地域自治時代、つまり社会主義時期で、このように五つの時代をえている。

紀元前214年秦の始皇帝は、嶺南を統合し、さらにそこに桂林、南海、象の三郡を設置し、それらを中央集権制の統治の下においた。それと同時に華夏族人<sup>[19]</sup>を移動させ、「興越雜処（越とともに交わり治める）」とした。これらの政策は、嶺南地域の社会経済発展にとって重要な意味を持つ。秦が滅びた後、秦の将軍趙佗は嶺南に居座って、南越国を建て、「南越武王」と名乗った<sup>[20]</sup>。そして越の風俗を尊重する「和輯百越（百越に融和政策を執る）」を行った。当時、越人の貴族の呂嘉<sup>[21]</sup>が南越国の実権を握っていたため、南越国は事実上南越人主体の漢民族との連合政権であった。後に漢の武帝<sup>[22]</sup>は、南越国を倒し、嶺南地域に蒼梧、郁林、合浦、南海、珠崖、儋耳、交趾、九真、日南の九つの郡を設けた<sup>[23]</sup>。そして郡の下に県を設け、嶺南の壮族先住民の社会体制を封建王朝制度の軌道に乗せた。ただし中央政府は嶺南に対して相変わらず趙佗の「和輯百越」を踏襲し、彼らの古い風習をもって統治し、徴税を行わないという特別の政策を執った。後漢の馬援<sup>[24]</sup>が南征した際、「所過輒為郡県（通り過ぎた所は皆郡・県になった）」「条奏越律与漢律、駁者十余事（越の律と漢の律を奏上したものが乖離するものは十数件もあった）」ということで、封建統治者はやはり越の人に対して「與越人申明旧制（越人と與に旧制を申明した）」をもって束ねたという<sup>[25]</sup>。これらの政策を見るかぎり、後漢まで越の社会構造は以前とさほど変わっていない。秦から隋代までは壮族地域は奴隷制度の形成と発展の時期である。中央の封建王朝は

壮族先住民に対して、二通りの政策を執っている。一つは中央の直接管轄の下で「采邑」制度を執り<sup>[26]</sup>、もう一つは一部の越人の集落族長や酋長を利用し、彼らに高い位を授け、地方の長官として任命し、奴隷と珍しい宝物等を占有させて、その地方を統治するというやり方で統治した。ただし壮族地域の奴隷制度は漢民族の奴隷制度と異なるところがある。それは東方家族式の奴隷制度である<sup>[27]</sup>。

唐代嶺南東部地域（現在の広東省）は、封建制度化に成功したが、西部地域（現在の広西壮族自治区）は地理的歴史的要因により、発展が比較的遅れた。中央政府はこれらの地域で羈縻制度を設けた。賦税は献上するが吏部の版籍には載らないという政策を実行するために地元のリーダーを任命して統治した。

宋元時代、桂西地域（現在の広西壮族自治区西部）の奴隷制度は消滅し、封建小作農制の時期に入った。この時期は壮族の歴史発展の転換期である。宋の仁宗皇祐年間（1049年～1054年）に、將軍狄青が兵を率いて儂智高が率いる壮族の反政府運動を鎮圧した<sup>[28]</sup>。それをきっかけとして壮族地域の土官制度<sup>[29]</sup>を実施した。それぞれの壮族の首領に知州、樞州、監州、知峒等の官職を授け<sup>[30]</sup>、その上に「文帖朱記」の官印権を与えた<sup>[31]</sup>。この官職は代々受け継ぐことができ、所属する民を統制した。この場合の土官は、政治上の統治者であり、土地の占有者でもあった。「波那 [pa6na2]<sup>[32]</sup>」あるいは「召那 [Kjau3na2]」と呼ばれていた。（この波那、召那は田畑の父であり、農奴主のこと）土官はさらに自分の所有する田を「勒那 [Luu k8na2]」（田の子、奴隷の意）に分け与え、労役や地租を手に入れた。元代、中央王朝は壮族地域に土司制度を正式に打ち出し、あまねく道・路・州などを設置し、少数民族地域の行政区画を整備した。漢民族の任命を除く達魯花赤<sup>[33]</sup>の官職を設け、「普天率土皆臣妾（天下の人々はみな俺の奴婢だ）」と詠むような支配ぶりだった<sup>[34]</sup>。それと同時に少数民族地域の村ごとの戸籍を調べ、土地を測り、賦税を設け、土官世襲制を実行し、功には賞を与え、罪を罰し、土司制度を明確に確立させた。

明代、土司制度はさらに発展し、「以夷制夷（夷をもって夷を制す）」という政策をひろく進め、壮族とその他の少数民族に対するさらなる権勢を強めた。一方

一部の地域では「土千戸所」と「土百戸所」<sup>[35]</sup> および「土巡検司」<sup>[36]</sup>などの兵制を増設した。その上、一部の強大な力を持つ土司に対して、「衆建寡立」「分而治之」（権力集中を避け、孤立させるために分けて治める）」とし、いくつかの小さな土司に分けさせた。これは中央政府の民族抑圧政策の一つである。しかし後に土司制度は社会の発展に合わなくなり、明代の半ば頃から新たに「改土歸流」の政策を実行した<sup>[37]</sup>。壮族地域のこの制度は、清代末期によく完成した。

1840年阿片戦争以後、中国は半植民地半封建社会になった。清朝末期に資本主義国家の工業製品が壮族地域に入り、壮族の自給自足の経済体系が自然消滅した。外国の宣教師も壮族地域の都市部に入り、教会を作り信者を獲得し、帝国主義の侵略政策のための情報を集めさせた。そのため壮族地域も多かれ少なかれ半植民地半封建社会になってしまった。清朝の統治者と帝国主義の侵略者は手を結び、少数民族を奴隷化した。

偉大なる革命家の孫文先生は、1911年に辛亥革命を起し、清朝の封建制度を倒し、中華民国を打ち立てた。しかしそれが次第に北洋軍閥の手に陥り、壮族地域の政権は旧桂系の軍閥陸榮廷によって独占された。その後軍閥間で内戦が起り、各民族は苦しい生活を強いられた。1921年に中国共産党が成立した。壮族人民と全国各少数民族とともに反帝国主義、反封建主義、反官僚資本主義、新民主主義革命の時代に突入した。長期にわたる民族への圧迫、差別、同化政策によって民国時代まで壮族は独立した民族として認められず、ただ「壮語を話す漢民族」とされた。

秦の始皇帝が嶺南を占領してから民国時代までの二千年余り、壮族及びその先人たちは、中央政権による民族への圧迫、迫害に対する戦いを一度も中断したことがない。その中でも影響の大きい蜂起運動には以下のものがある。まず前漢末期の句町国・王邯<sup>[38]</sup>の王莽政権に抵抗する戦いである。その後、後漢の烏譚人の暴動<sup>[39]</sup>、唐代の西原僚人・黄乾曜の蜂起<sup>[40]</sup>、宋代の區希范<sup>[41]</sup>、農智高の反乱<sup>[42]</sup>、明代の韋銀豹の蜂起と八寨の民族反乱<sup>[43]</sup>、清代の太平天国の乱<sup>[44]</sup>、辛亥革命前の反政府秘密結社運動と孫文先生が起こした蜂起などがあつた。さらに

近代になって中国共産党による百色・龍州各地で行われた土地革命運動に至るまで、壮族は参加している。壮族のこれらの反抗運動は反封建社会的なものであるが、それらは民族圧迫による政策によって失った自由を求める地域性と民族統一政権を求めるという性質も持っている。その中でもっとも突出しているのは、唐代の黄乾曜が中心となり起こした「西原僚人の乱」と儂智高が中心となった「広源州の乱」である。彼らの主張は地域的な民族政権を確立することだけで、国家統一は維持し、決して国を分裂させるものではなかった。

1949年中華人民共和国成立後、中国共産党は民族平等政策を打ち出し、壮族もようやくひとつの民族として承認された<sup>[45]</sup>。さらに中華人民共和国憲法と民族区域自治実施綱要に基づいて、1958年広西壮族自治区が成立した<sup>[46]</sup>。同じ年に雲南省の文山壮族苗族自治区、1962年広東省連山壮族・瑤族自治県なども設立された。ここによりやうやく壮族は、民族平等の地位を得ることができたのである。その後、1984年から1987年までの間、広東、湖南、貴州、雲南省の地域でバラバラになった壮族地域が「壮族の郷」として一つの行政区画にまとめられた。分散していた壮族に「郷<sup>[47]</sup>」レベルの平等自治の権限が与えられたわけである。これにより壮族はようやく民族自治区の時代に入った。

## 第二章 壮族文化及びその特性

ひとつの民族がその民族たる所以、根元的な理由は、その民族固有の文化にある。民族が持つ文化の特徴は、民族を識別するための道しるべとなる。民族文化は民族と共に生きる。壮族は珠江流域の土着の民族である。壮族の先祖は、生活をとりまく自然環境と特定の生産方式によって長い歴史発展の中で、独特な物質文化と精神文化を生み出した。それらの文化は、民族文化の個性と地域文化の特性が際だっている。そして壮族の文化は、中原と東南アジア、華南と西南各省の文化が混じり合い、相対的に開放、融合力を持つという特徴がある。長い歴史の変化の中で、壮族文化は独自の文化の特性を守るために、外来文化の影響に対して、模倣力と創作力を持って自らの族の文化と結合、中和、融合させた。そして

さらに自身の文化に対して、つねに生命力に満ちた活力を持たせ、発展させた。壮族の先祖にとり、氏族集落時代は民族文化の自主発展の時期である。壮族先住民の西甌、駱越人氏族社会から階級社会に入り、さらに時代が進み、愚かで道理に暗い時代（蒙昧時代）から文明時代に入るとき、秦甌戦争<sup>[48]</sup>が勃発した。そして秦の始皇帝は嶺南を統一した際に、西甌と駱越を彼の版図に組み込んだ。それ以降、中華民国時代まで壮族は自主発展時代から中央政権統治下へと転じた。漢民族とその他の少数民族と混じり合いながら、生存と発展がなされて来た。そのため壮族文化は、その他の民族文化とぶつかり合いながら生まれたもので、嶺南越人文化<sup>[49]</sup>の主題を持つ多元的な構造を持っている。

## (一) 自主発展段階の壮族先住民の文化形態と特徴

### 1 自らの体系を形成した「話壮」[Va6c ue n 6] (壮語)の民族言語文化

言語は文化の一部であり、民族文化の活きた媒体でもあり、民族生存の重要な紐帯でもある。言語は異なる民族を区別するための、もっとも明らかによく使われる標識のひとつである。壮族は土着民族であるため、壮語と壮族文化はともに生きている。壮族の文化の特徴は民族の言語・文字に現れる。自主発展の先秦時代、壮族先住民はすでに独自の体系の言語文化を形成していた。壮語は南北二大方言に分けられているが、発音、文法の構造、基本語彙はほぼ共通している。言語の系譜に従って理論の模式を立てるならば、壮語はシナ・チベット語族のチワン・トン、チワン・タイ語群に属する。ただし近年ある学者は、壮語・侗語の属する壮語と漢語について比較研究すると次のようになると発言している。発音系統、基本語彙、語順、文字の構造理論、認知思惟方式などを通じて比較すると、同一性において明らかに差異があるという指摘である。例えば壮語の単語の構造は、一般的に中心語は前になり、修飾語は後になる。壮語の鶏・公(雄)[kai5pou4]は、漢語で言うところの公鶏(雄の鶏)で、肉・猪(豚)[no6mou1]は漢語の猪肉(豚・肉)、家・我[ra: n2kou1]は我家(私の家)、走・先(行く・先に)[pja: i3ko: n5]は先走(先に行く)にあたる。これらは壮語と漢語語彙

の構造の逆転現象を表し、認知思惟ロジックの「南轅北轍<sup>[50]</sup>」にあたる。両者の関係は発生学の関係ではなく、接触の関係である。考古学の発見によれば、華南～珠江流域において、周時代の陶器に大きく刻む文字記号のようなものがあった。これは自主発展時代の壮族の先住民たちが、すでに自身の民族の文字を作っていたことを意味している。秦漢以後は、漢民族の流入の影響に従い、壮族先住民は漢字の形、音、意の六書構字法を借りて、自民族の文字すなわち古代壮字、或いは「土俗字」、「方塊壮字」と呼ばれる文字を作る方向に転じた<sup>[51]</sup>。

## 2 「那」[na2]（水田・稲作）文化中心の民族文化体系の形成

壮族の先住民は、江南地域、主に珠江流域の自然地理環境と気候の特徴に適応性を持っていた。野生の稲を馴化させ、栽培稲とした。我が国で最初に稲作文明を開いた民族のひとつである。生産方式は文明の類型を決定する。壮族は稲作の民である。彼らは水田のことを「那」[na2]と称し、頭に「那」という文字を持つ地名が珠江流域及び東南アジアの多くの地域に見られる。文化生態系の分野において壮族文化は、稲作文明類型のみならず、全体的に地域文化の個性を表している。「那」の字を持つ地名は、稲作文化と民族文化の豊かな意味を持ち、この地域で生活している人々の共同体の鮮明な歴史の記号となる。それゆえに我々はこれを「那文化」と称する。

壮族の先住民の居住地は、珠江流域で亜熱帯に属し、地理気候環境は稲作に適している。この地域は古くから我が国の典型的な稲作文化の地域であり、野生の稲が広く分布し、稲作農業の発祥地のひとつである。壮族の先住民は長い間、野生の稲を採集している過程の中で、次第に稲の成長の自然法則、例えば「从潮水上下（海水の潮の満ち引きによって苗が上下する）」などを把握した。そして「雒田」を開墾し、水稻を栽培するようになった<sup>[52]</sup>。湖南省南部道県玉蟾岩遺跡と広東省英徳市牛欄洞遺跡で、今から1万年前の籼が発見された。歴史文献の記録、考古学発見、体質人類学の研究によれば、この地域の原始人類は、壮侗語の民族先住民であり、漢族、瑤族、苗族などは、秦漢時代以後に次々とこの地域に入ってきた

たことが分かる。壮族の先住民は、この地域の稲作文明の創始者であることを意味する。史書の記している「雒田」は、実は越語の「麓那 [luə k8na2]」すなわち「山谷の間の一面の田」の半音半意の訳語である。未だに広西、広東など古越人居住の珠江流域の広い地域に大量の「麓」(雒、六、禄、淥、緑、鹿、羅)を含む地名が残されている。「那」[na2]を含む地名はなおさら数え切れないほどである。その他漢語の古書籍の中に、例えば『山海経』『詩経』『説文解字』の中にある「秣」「秣」「膏」「糗」などの文字は、壮語で野生の稲、稲、粳、稲米、稲米飯を意味する語の発音を漢字で記したものである。壮族各地に広がる「那」のつく地名は、規模の大きいものは県、郡、郷、小さいものでは村や堤、畑、田の名前にあり、特有の地域性地名文化景観を形成している。華南から東南アジアに分布する「那」地名の広大な地域は、「那」文化圏を形成している。それらは深層的文化内包を持つ。壮族とその先住民は、長い歴史発展の中で「那」によって作られ、「那」によって住み、「那」によって食べ、「那」によって衣服を身につけ、「那」によって楽しむという「那」を中心とした生産生活模式及び那文化体系を形成した。

### 1) 「那」によって作られる生産性文化

この文化は、主に双肩石斧<sup>[53]</sup>と大石鏟文化に現れる。新石器時代の道具の出現として双肩石斧がある。原始の農業においてそれを生み出し、野生の稲を栽培の稲に進化させたものである。稲作農業発展のため壮族の先住民が絶えず簡単なものから複雑なものへ、低級なものから高級なものへと生産道具を創造した。新石器時代晩期に出現した大石鏟文化は、壮族先住民の稲作生産方式とその功利目的の産物である。1950年代以来、邕江とその上流地域<sup>[54]</sup>に複数の、今から5000年あまり前のかかなりの規模の大石鏟遺跡が発掘された。そこで発掘された大石鏟は、きれいに磨かれ、角がはっきりし、曲線が柔らかく、精巧に作られている。特にその中で形が巨大で造形の美しい石鏟は、まるで芸術品のようで、人々を驚かせた。大石鏟は、双肩石斧から派生したもので、沼地や水田などの農作業に使われるために生まれた。その後ある種の祭祀用の神器へと変化した。さらに古代

壮族先住民の大石鏟に対する崇高な意識が込められるようになった。そこには豊作への祈り、労働の賛美がうかがえる。また大石鏟の発生は、新石器時代壮族先住民の生産力の大きな進歩を表し、稲作農業の発展はすでに一定の規模と水準を保っていたことを表している。また彼らの稲作生活から発した神に祀る意識、美的なセンスと芸術創作力はかなり高い水準にまで達していた。

## 2) 「那（水田）」の中にある居住文化

この「那（水田）」文化は、「干欄」文化<sup>[55]</sup>に現れる。壮語では家のことを「欄」[ra: n2]といい、下に空間がありその上に住居を建てる高床式住居を「干欄」[ra: n2kja: n3]と呼んでいる。あるいは「更欄」[ku n2ra: n2]とも呼ばれている。これは高いところに載っている家という意味である。干欄 [ku n2ra: n2] は漢字による発音表記である。壮族の集落は、主に水源豊かな田圃の周辺に分布している。その干欄住居形式の家は、田圃の周辺の山の起伏に沿って建てられる。その建築の形式は、木あるいは竹の柱を使って、地面からかなりの高さに「底架」と呼ばれる高床を作る。そしてその底架（高床）の上に住居を建てる。上の部分に人が住み、下の部分には動物を飼い、物を貯蔵する様式である。この建築様式は、南の山間部の多湿多雨、高低差のある地形に適応している。湿気を防ぎ、獣からの害を防ぎ、盗難を防ぎ、また風通しもよく、光を集めやすいという土地を最大限の活用した特徴を備えている。

『魏書』「僚伝」の記録によると、干欄の最初の形は「依樹積木以居其上、名曰干欄。干欄大小随其家口数。（木に寄りかかり、木を積んでその上に居住する。名は干欄という。干欄の大きさは家族の人数によって異なる）」とある<sup>[56]</sup>。長い歴史発展の中で干欄は、建築過程から全体と部分の構造、機能の特徴に至るまで豊富な文化要素を多く含んでいる。干欄建築は壮族の先住民の、自然環境に対する適応性を反映している。これは我が国の古代建築遺産の中で重要な位置を占め、いまだに我が国の南方の町や村の中で生かされている。

### 3) 「那(水田)」にたよる飲食文化

1960年代から考古学者によって、邕江及びその上流の左江、右江の流域、邕寧、武鳴、横県、扶綏などの地方に新石器時代の早期貝塚の遺跡が分布していることがわかった。またその遺跡から石杵、石磨棒、石磨盤、石錘などの穀物を加工する道具が出土している。桂林の甑皮岩人類洞穴遺跡の中から、今から9000年あまり前の新石器時代早期の陶片が見つかった。遺伝学の資料によれば、その当時、この地域で加工する穀物は主に水稲であった。その理由は麦や粟は後にこの地域に入ってきたからである。また民族考古学によれば、陶器は穀物を食べるために作られたものであるという。これらの出土品によって壮族地域は、早い時期9000年前にすでに水稲が食べ始められていたことが証明できる。しかも水稲を食べるための杵や臼、錘、陶缶などの加工工具や炊飯用具を発明した。紀元前1100年あまり前、『詩経』の「大雅」〈公劉〉にはすでに「乃積乃倉、乃裏餼糧」の句がある。その詩句の「餼」(または糗とも書く。すなわち乾飯)は、古越語に由来している。北方で言う「干糧」のことである。現在の壮族は、なお稲や水稲、米飯類のものを「糗」[hau4] または「膏」[khau3] と呼ぶ。これらのことから壮族の先住民は、太古の時代にすでに米を煮て食べていたことが証明される。その後、稲作の伝播に従い、我が国の中原地域に伝わり、『詩経』の中に記録された。壮族と傣族の民間に伝わっている諺に、次のようなものがある。「水里有魚類(水の中に魚がいて [dɔ̃ i2nam4mi2pja1])、田里有稻米(田圃の中に稲がある [dɔ̃ i2na2mi2khau3])」この意味は、壮族の先住民は米を食べ、魚を食すという、田圃に頼って生きる「那」を中心とした飲食文化を反映したものである。古代壮族の先住民は、自然環境に応じて、繰り返し糯米の品種を選別、改良していった。そして広い地域に栽培していった。糯米は自分たちの生活の中心的な食物となった。そして糯米中心の食物加工製品「烏色糯米飯(五色の糯米飯)」[hau4naŋ 3dam1]、「糍粑」[ɕ i2]、「粽子」[fan 4] を産みだし、好んで糯米を食べる民間の習俗文化が形成された。

#### 4) 「那」の服飾文化

壮族先住民は、稲作文化の発展につれ、綿や麻の紡績や服飾加工業を発展させた。壮族地域は細く長い繊維の麻類の資源が豊富で、野生の麻のみならず人工栽培の麻もあった。そのため長い麻の紡績の歴史を有している。広西壮族自治区の新石器時代文化遺跡の中から、石製や陶製の紡輪が出土している。それは麻の繊維を廻しながら撚る道具である。『漢書・地理志』の記録によれば、「越地方は海に近いので、犀、象牙、玳瑁、真珠、銀、銅、果物、布が集まる場所である」。またその注釈の「顔師古注」には「布というのは様々な細い糸で織った布のことをいう」とある<sup>[57]</sup>。我が国では古く布と称するものは、主に麻、苧、葛など植物繊維の織物である。『爾雅』にも「麻（苧）、葛曰布」という記録があり、壮族が早い時期から麻類の繊維を布として織っていたことがわかる<sup>[58]</sup>。広西平楽県銀山嶺戦国墳墓では男性の墳墓からは兵器が見つかったが、紡績道具はなかった。女性の墳墓からは陶の紡輪が見つかり、兵器はなかった。当時の壮族先住民はおのずから男女の役割を分担していたことがうかがえる。女子の主な仕事は紡績に従事することだった。その技術は非常に高かったことが知られている。『尚書』「禹貢」には「(揚州の) 島夷卉服、厥篚織貝」とある。この揚州は淮河の南から南シナ海までの広い地域を指す<sup>[59]</sup>。貝は吉貝、劫貝、古貝の略称であり、古貝はその音訳である。織貝は綿で織った織物のことである。壮侗語派の壮語、布依語、臨高語、傣語、黎語、そしてベトナムのノン・タイ語、ラオスのラオ語、タイのタイ語などは、それぞれ綿を [fa: i5]、[bu: i3]、[va: i5] などと呼んでいる。これは同源で、しかも先ほどの吉貝、劫貝、古貝と関係がある。このことはこれらの民族が今の場所に移住する前にすでに綿を栽培し利用しており、それが彼らの共同経営生活の一部であったことを証明するものである。そのため壮族先住民は、最初に綿を栽培した民族の一つであるということが言える。

#### 5) 「那」は祭りを楽しむ

祭りは民族がまとまり、一体となることを具体的に表現するものである。壮族

の祭り文化は、稲作農耕文化と密接な関係がある。物、行為、概念を一体化して表現する形態である。それは稲作文明の類型と壮族文化集団の象徴である。そして祭りによって稲作農耕をめぐる壮族先住民の概念の中に一連の崇拜対象が形成される。祝祭はその対象を祀る中心的な活動となる。例えば紅水河流域<sup>[60]</sup>では旧正月一日から十五日まで蛙の神を祀る「蛙婆節<sup>[61]</sup>」が行われる。新年には牛小屋を祀り、春節を過ぎると耕作の儀式を行う。種蒔きの時期になると苗代の中で様々な遊びをする。五月、六月頃、苗が青くなってくると、「稻魂（稲霊）節」と「牛魂（牛霊）節」と呼ぶ儀式を行う。収穫時期になると、新しく収穫した米を食べる祭を行う。十月になると霜が降り始めるが、その頃に収穫した米による餅の祭を行う。このようにすべての祭には一定の儀式があり、それに合わせるように壮族には歌がある。多くの地域には田植えと収穫の時に、盛大な歌垣の歌会をする<sup>[62]</sup>。これらの活動を通して彼らは、生活の物心両面を満たすことができるようになる。

### 3 銅鼓（咽 [ŋ uə n2]）を代表とする青銅文化

壮族地域の青銅鑄造業は、春秋時代から始まった。そして戦国時代に大きく発展した。初期に鑄造した器物は、鉞（まさかり）、斧、鍬（金属で作られた矛や鎗の突先）のほかに、また刀、劍、矛、鐘、鼓、鼎、鈴、人首柱形器、叉形器などがあり、これらは造形にも優れ、文様の図柄も豊富で地域色が鮮明である。その中で最も代表的なものは、銅鼓である<sup>[63]</sup>。

銅鼓は壮語では「咽 [ŋ uə n2]」と呼ばれている。壮語の意味は「可聞声（声が聞こえる）」、「聽（聴く）」、「听见（聞こえる）」、「听到（聞こえる）」である。銅鼓を打つと、大きな音がするからである。人々はその特別大きな音によってこの名前を付けた。銅鼓の生産は中国嶺南地域である。銅鼓の出土分布は、東は広東省の北江より西の地域、西はミャンマーにまで至る。北は四川省大渡河の上流、南はインドネシアのスラバヤ島と、その範囲は「那」の地名の分布、すなわち「那」文化圏の範囲とほぼ重なる。中国は世界中で銅鼓の出土と保有数が最も多い国で

ある。主に広西、広東、雲南、貴州、四川、重慶、湖南などの地域に分布している。壮族の居住地が集中している広西に出土、収蔵されている銅鼓の特徴は、分布の密度が濃いことにある。広西の大部分の県には銅鼓が出土している。第二の特徴として多くの類型が見られることである。最も早い時期の銅鼓は万家壩型銅鼓<sup>[64]</sup>であるが、その銅鼓を含む八類型の銅鼓はすべて広西にある。第三の特徴として埋蔵量の多さが挙げられる。全国にある博物館に収蔵されている銅鼓は500余りあるが、そのうちの三分の一は他の地域に収蔵され、残りの360個の銅鼓は全部広西にある。国内外の収蔵数として最多である。また民間による収蔵は、登録されたものだけでも1400余りある。その中でも表の直径が1.65mある大きな銅鼓は、「世界銅鼓の王様」と呼ばれ、広西で出土している<sup>[65]</sup>。それは2000年あまり前のものである。第四の特徴として技術の巧みさである。銅鼓の絶頂期の代表類型は、北流型、靈山型、冷水冲型があり<sup>[66]</sup>、これらはみな壮族の先祖の傑作である。銅鼓は型に入れて作る。胴部と表面部には船紋、鹿紋、雲雷紋、羽人（羽根つきの飛仙）などの文様が刻まれている。表面の一部には立体の蛙が装飾されている。唐代・劉恂撰『嶺表録異』の中で、「銅鼓の表面と胴部は繋がっていて、すべて銅で鑄造されている。その体にはあまねく虫、魚、花、草があり、その造りは均一で、厚さは二分（約0.6cm）より厚く、鑄造技術の巧みさはすぐれている」と賞賛している<sup>[67]</sup>。今日の成分分析検査によるとその合金成分は、銅、錫、アルミニウムの比率はおおよそ7：2：1である。『考工記<sup>[68]</sup>』の「鐘鼎の配合」についての表記「六分が銅、一分が錫」というのとほぼ一致する。他には当時自然科学の最先端とされた円を刻む技術を用いて、銅鼓の表に太陽の文様を描いている。その製法技術と造形技術は、かなり高いレベルに達している。第五の特徴は、用途の広さにある。銅鼓の鑄造は、壮族先住民が原始社会から階級社会へ、未開化から文明へと進んだある種の権力の象徴となった。これらは国宝として黄河流域の鼎と同等の価値を持っている。

社会の発展とともに銅鼓は、祀り用の礼器から娯楽用の楽器へと変容していく。第六の特徴としては、代々伝承されているということである。雲南省文山

壮族自治区自治州古籍管理事務所が蒐集整理した『布洛陀経詩』の中に、「銅源詩」がある<sup>[69]</sup>。その詩の中には氏族集落社会後期に、壮族先住民がいかに銅を発見し、精錬し、铸造したかが書かれている。『後漢書』『馬援伝』によれば、馬援は南征した際「交趾において銅鼓を得る」とあるように銅鼓を得、それらを駱越銅鼓と称した<sup>[70]</sup>。『隋書』『地理志』によると「俚人銅を鑄り、大鼓となす……鼓者は(都老)[tu2la: u4]と呼ばれる」とある<sup>[71]</sup>。「都老」は壮語による表音で、「都」[tu2]は人の意味で、「老」[la: u4]は大いなるもの、最長老の意味である。「都老」は「頭人」(集落長・族長)、「大首領」「大長老」の意味である。このように壮族先住民が銅を使う事例は、多くの文献にある。また現在でも壮族では依然として銅鼓を使用する。一部の地域では、祝祭日になると必ず銅鼓を打つ。銅鼓舞を舞い、「対唱山歌」(歌掛け)などを行う。第七の特徴は、壮族すべての人々が銅鼓を崇拜することである。

銅鼓は壮族先住民の概念では聖なるものであり、銅鼓を「ㄗ銅咽法」[me6ton 2ŋ uə n2fa4]と呼ぶ。その意味は、「天の大銅鼓」である。毎年旧正月1日に銅鼓を祀るが、その時は銅鼓に向かって礼拝をする。銅鼓は稲作農業に由来するある種の文化であり、銅鼓に刻まれている太陽、雷紋、波模様、蛙紋などは、すべて農作物と関係がある。一部の地域では銅鼓のことを「蛙鼓」と呼んでいる。著名な民族学者の羅香林<sup>[72]</sup>は次のように述べている。「銅鼓の製作は雨乞いと関係がある。これについては客観的な根拠があり、銅鼓の表面を見れば、常に立体の蛙や蝦蟇がついていることからわかる。これらのほとんどが雨乞いのために作られたものである。」

壮族の人々が銅鼓をしまうときは、稲の縄でその耳の両側を縛り、銅鼓をひっくり返して中にたくさんの粉を入れるという風習がある。その風習は「養鼓」といい、銅鼓を養うという意味である。これらの風習はすべて銅鼓と蛙との関係を物語っている。また稲作農業との密接な関係も示している。銅鼓は稲作によって生まれ、銅鼓文化は、「那文化」をもっとも反映する造形である。

#### 4 花山壁画を代表とする芸術文化

先秦時代、西甌駱越先住民の絵画芸術の集大成として、赤い鉱物の顔料を用いた壁画をあげることができる。200kmあまりの長さの広西左江流域に、178カ所の崖に壁画が残っている。その特徴は、造形の素朴さと風格のおおらかさである。巨大な規模の壁画は、まるで回廊のようにになっている。その規模、勢い、広大さは世界の奇観とも言える。その中に左江の支流寧明江のほとりに輝いている「芭萊 [pjalla: i2]（壮語では絵が描かれている山の意。漢語の訳“花山”）<sup>[73]</sup>」が最も立派である。描かれた人物やものの多さ、規模の大きさ等は、我が国で発見された壁画の中で屈指のものである。また世界的にもすばらしいものである。壁画は、写実的であり、かつデフォルメ、コラージュの技法が用いられている。手の動き、足の動き、人の踊りの描写はいきいきとしている。壁画の下は足場のない絶壁だが、身長の高い人物の絵が左右対称かつ上下のバランスをとって描かれている。また筆の運びは力強く、まるで生きているように描かれている。これらは、壮族先住民である西甌駱越の人々の優れた芸術性、想像力を充分表している。一部の学者は、左江流域の壁画に描かれている切り絵のような蛙のまるで立っているような動きや、蛙の動きを真似する祭の踊りの場面は、壮族先住民の雨乞いを目的とする蛙崇拜の再現であると指摘している。その源は稲作文化、つまり「那」文化の一つの表現形式である。

#### 5 「布洛陀」[pau5lo4to6] 智慧祖神を代表とする神話文化

古代神話は、人類の幼少期の産物である。原始人類の想像力であり、自然を人格化する。想像力により、天地万物の起源、発展、原因と結果を説明する。想像力によって自然を勝ち取り、自然を征服し、自然を支配する。それは彼らの原始世界観の産物である。壮族先住民は、氏族集落時代において、独自の特色ある体系を持つ神話を形成していた。その起源・発展と民族言語発展は、ともに叙事能力を高めてきた。それは西甌駱越部族の原始文化の結晶でもある。そのうち「七淥甲」（またの名を『麼淥旁甲』）という神話は、女性神の生殖行為と人類の起源

を記すものである。「七淥甲」の壮語の音意は、[me6]「母」と[luk8]「子」の合成で、[kja: p7] 意味は「母子合体」、あるいは「身ごもる母」、すなわち祖母神である。彼女は偉大なる生育女神で、人類を創造した懐胎女神であり、母系氏族集落時代の主神である。男の主神「布洛陀」は、天地を改造し山と川を拓くという功績が叙述されている。「布洛陀」は、壮語の麼教の解釈によれば、意味は[pau5] 祖公（男神）、[luk8] 河谷と [to2]（鬼神体に附す、法術、法術を施す意）で、合わせて河と谷の中で法術力が強い男神である。また智慧の祖神とも呼ばれている。彼は何でも知っており、できないことはない創世神であり、父系氏族集落の男神である。布洛陀は初め、おそらくある集落の祖神であったのが、しだいにその集落の権力の拡大に伴って、それらの連盟の中で主導的な位置を占めるようになったのであろう。そのためその祖神が連盟的な集団全体の祖神となった。

布洛陀神話に基づいて、長詩「布洛陀」が生まれた。それは壮族の創世史詩である。有史時代以前の壮族先住民の社会的百科全書である。この史詩の中には遠い昔の壮族先祖の生活のための戦い、社会生活、風俗、風習、原始宗教、原始的イデオロギー、そして原始社会崩壊の過程など豊富な内容が含まれている。生産力の発展や、階級の分化に従って原始社会がしだいに分解するという、集落連盟と国家の崩壊を記している。社会の発展とともに各集落の往来がしだいに頻繁になり、相互の交流によって体系的な神話を形成していく。例えば「特康が太陽を射る」「布伯」「岑遜王」「莫一大王」などは、これらの産物である。布伯、候野、郎正と特康、彼等の物語はすべて父権社会の男性の輝く業績を記録するものである。その中の布伯は、雨水を求めるために天の雷王と闘い、英雄となる。その他の候野、郎正、特康は、旱魃を解消するために、11個の太陽と闘う英雄である。彼らの物語は、当時の壮族がすでに農耕社会に入り、人々が風や雨を思い通りに従わせたいという願いを反映している。岑遜王と莫一大王は、農業発展階級形成国家の出現に伴う軍事民主制時代の英雄である。「布洛陀」を代表とするこれらの「体系神話」は、また「文明的、総合的な神話」ともいえる。その特有の神様の形式をもって、壮族先住民社会晩期におけるしだいに階級秩序化されてきたそ

の様相やいきいきとした景観が再現された。早期文明社会と思维的な論理に、多くの要素が入りこむようになった。これらは民族精神文化の最初の記録である。文字のない時代において人々の口頭を介して伝承されたこれらの神話は、壮族先住民が自主発展の段階において、すでに文明の民族文化の入口をくぐったことを証明している。

## 6 「諾鷄 [do: k7kai5]（鷄占い）」と「麼 [mo1]（麼教）」を代表とする原始宗教文化

氏族社会にあって人々は、「万物すべて霊あり」という観念の下に支配され生活していた。各種の宗教行為は、事実上こういった古い信仰観念のあらわれである。占ト術は最も古い宗教呪術の形式である。商代の中国北方では、甲骨による占いが極めて盛んであり、周代には筮占術が流行した。しかも筮占の専門書『易経』も現れた。また天体の現象を観察することで生まれた占星術も、殷、周時代には盛んであった。しかし先秦時代の南越甌駱人にとっては、鷄の占いのほうが盛んであった。それは鷄の骨の占いであった。『史記』「孝武本紀」の記録によると、「是時既滅南越、越人勇之乃言、越人俗信鬼、而其祠皆見鬼、数有效（中略）乃令越巫立越祝祠、安台無壇、亦祠天神上帝百鬼、而以雞卜。上信之、越祠雞卜始用焉（この時すでに南越を滅ぼし、越人の勇之が言う「越人の風俗は鬼を信ずること。しかもその祠に皆鬼を見、調べて見ると案外有効である。そこで越の巫女に命じて、越の祝詞を立てることにした。台を安じるが壇はない。また天神・上帝・百鬼を祀っている。鷄卜をもって神に祈る。帝はその話を聞き、信じた。越祠の鷄卜はここから初めて用いる）」という<sup>[74]</sup>。また『資治通鑑』「漢武帝元封二年」の条、胡三省の注には、「史記正義が言い、鷄卜の方法は、鷄一羽、狗一匹を用いて、生きたまま祈る。祈願が終わると、すなわち鷄と狗を殺し、煮立ててからまた祀る。単に鷄の両目の骨を取って使うのみである。骨に自ら穴ができ、その亀裂の模様が人の形に似ていると吉とする。模様が不足するとすなわち凶となる。今も嶺南地域でなおこの術を行う」とある。

壮族の民間には未だに何種類もの「鶏卜経<sup>[75]</sup>」の写本が流布している。壮語では「[do: k7] (骨) [Kai5] (鶏)」という。広西壮族自治区少数民族古籍整理事務室には「鶏卜経」が保存してある。壮語で書かれた鶏卜の図説絵は数百ある。これによって鶏骨卜が自ら体系をなしてからの歴史がかなり古いことが分かる。歴史の古さから、かつて漢武帝からも推奨されている。

先秦時代の西甌駱越民族は、長い発展過程の中で自分たちの原始宗教信仰を育てた。彼らの崇拜の対象として、火の神、水の神、木の神、土地の神、山の神、石の神、雷神、太陽神などがある。彼らは自然界の一部分を昇華させ、自分たちと血縁関係があるように人格化させ、神を形成した。そして独特のトーテム信仰の崇拜対象を作り出した。例えば花、蛇、鳥、蛙、犬、稲作などのトーテムがある。万物に神ありという核心としての自然崇拜と神話体系、そして鶏骨卜術の上で生まれ、形成されたのが「越巫」である。その神を祈り、祈禱する形式が「麼 [Mo1] 教<sup>[76]</sup>」である。麼 [Mo1] の意味は、口で喃々と経詩を読み、神に通じて祈禱するという意味である。原始巫教には主神がない。巫女たちの占いによって吉凶を占う。そして麼教の創世神としては布洛陀が最高の神となる。一連の法要儀式や固定した形式の口頭伝承には、五言の韻を踏むという祝詞がある。後に古代壮語の文字によって記録され、流布したのは「司麼」([θ au 1mo1]) である。それは『麼教経書<sup>[77]</sup>』、略して『麼経』と称した。儀式の時「布麼 [pou4mo1]」すなわち「麼公」によって、祀りごとが執り行われる。「麼公」は儀式を主祭し、祖神を天から招き、古い決まり事を伝え、災いを祓い、福を呼ぶという仕事をする。麼教は、原始自然のままの民族宗教文化に属し、原始社会における生産力の低い社会条件下で、人々が神の力を借り、人間と自然、人間と社会、人間と人間の互いの関係をうまく調和させるものである。そして信仰によって生存と発展を祈る。麼教の中で布洛陀は、創世神から宗教神へと変成し、自然神から社会の神へと変わった。もともとそれぞれの地域にあった多神信仰から、一神信仰へ習合していく中で、壮族そのものがいくつかの集落から連合国家になっていく過程が見られる。このことは「麼経」によく登場する壮族先住民に「十二国」[cip8n

i6tco: k7]（十二のトーテム信仰を持つ部族）と呼ばれる十二の動物トーテム信仰がある<sup>[78]</sup>ということから証明できる。「麼経」の文字による記録の写本は、明清時代にようやく現れるが、現在蒐集されている三十数種類の写本からみると、その中には道教、儒教、仏教などの神や信仰が混じり合っている。その基本となる部分は、言語、内容、信仰、そして機能は、依然として原住民の宗教文化の本質を保っている。このことは壮族先住民がしだいに野蛮時代から文明時代に入り、母系社会から父系社会へと変化し、氏族集落社会から階級社会へと変化する過程を物語っている。この経の存在は、壮族先住民の集落時代とその後の発展、経済文化、信仰宗教、道徳観念などを研究するにあたって、きわめて重要な歴史・文化・学術価値を持っている。

## 7 宇宙「三蓋 [θ a:m 1 ka:i 5]（三界）」説と万物「波也」[po6Me6]に雌雄があるという素朴な哲学思想

壮族先住民は、長い生活と生産過程の中で、天地万物の生成と変化を観察し、しだいに素朴な哲学思想を生み出した。現在残された大量の神話・伝説を通して読むと、壮族先住民は天地万物と人類の起源に対して自分たちの考え方を持つだけでなく、自然万物の運動変化と、人間と自然の関係に対して解釈し、壮族の原始哲学の基本理念を樹立している。壮族の神話「天地分家（天と地の分かれ目）」の中には、天地万物はもともと大きな木の塊で、天と地は分かれていなかったとある。しだいに木の塊が回り始め、どんどんとスピードを出し、三つの卵の黄身のように分かれた。そしてその三つの塊は爆発したが、一つは上に飛び空となり、一つは地下に沈んで川と海となった。そしてもう一つは真ん中の大地となった。「三蓋」[θ a: mlka: i5]を形成したのである。それは三様の自然界物体となった。この考え方に基づいて先住民は、民族の特色として豊かな宇宙構造理念を確立した。これは有名な三界説である。この三界説によれば、宇宙は「天上」、「大地」、「水下」の三界に分かれている。天上は上界であり、神の住むところである。雷

神は「天上」を司る。「大地」は中界であり、人間が住み、布洛陀が管理している。「水下」は水界であり、小人が住んでおり、畷呃 [tu2ŋ iə k8] (水神)が管理している。壮族の神話・歴史・伝説、昔話の中でも、また壮族の民間宗教の「麽教」教典「布洛陀」の中でも、すべて三界説で世界を説明している。銅鼓の紋様の構造にも、この三界思想がよく現れている。銅鼓の表面は、上界を意味し、雷紋で表されている。鼓の胴体は中界を現し、羽人や鹿の絵が描かれている。銅鼓の足の部分は下界を現し、波の模様が描かれ、それぞれが区別されている。今日に至っても、三界説は壮族の中に流伝している。壮族先住民は、中界の大地の動植物と人類すべて男性の子孫は布洛陀、女性の子孫は麽淥甲によって生まれたと考えていた。人々は布洛陀の教えに従って生産生活をし、布洛陀の教えに従って平和に暮らしていた。

長い生活の中で壮族先住民は、「波也 [pə6Me6] (即ち雄と雌)」の二種類があることを発見し、動物も二種類に分かれていることを知った。自分自身と自然を比べて自然を認識する。壮族先住民から見れば、世界万物はみな両性に分かれており、この両性類別は、互いに対立しながら結びついている。万物の発展変化も、この両性類の組み合わせによって進行し、万物両性類観を形成した。

壮族の神話、民間宗教、民俗事象、壮語の中にもこの「波也」の思想が具体的に現れている。例えば壮語で天は「pə6fa4」で、意味は「天の男」で、地は「me6duŋ1」で、意味は「地の母」。太陽を父と呼び、月を母と呼ぶ。また晴天では暑く、雨天では寒いなどの気象現象に対しても、雄と雌としている。「ŋ on2pə6ŋ on2me6」は「一日は雄、一日は雌」の意味で、至高無限の天に住む神に対して「波叭 [pə6Me6]」と呼び、意味は「雷公」で、雷神が人間世界に派遣した使者の蛙に対しては、「婭圭」[ja6kve3]といい、すなわち「蛙婆」と呼ぶ。天と地の力を合わせて雨を降らせる。「蛙婆節 (ワーポチェ)」という祭りの中では、最初に捕まえた蛙を「天女」と言い、蛙を捕った男を「蛙郎 (蛙の婿)」と呼ぶ。そして互いに結婚の儀式を行う。そしてその蛙の婿はこの祭りのリーダーにされる。

壮族の祭りの田の神は「波那七那」[pɔ6na2Me6na2] と呼ばれている。意味は「田公田母」である。壮族民間宗教の麼教の最高神は、男の祖神・布洛陀と女の祖神・麼濛甲である。儀式があるたびに彼らを呼び降ろして、主神の座に座らせる。男女の神が揃うと民間の災いが除けられ、福をもたらす。このような万物の波七観は、他の分野にもさまざまに表現されている。例えば高い音の銅鼓の音は [ŋ uə n2pɔ6]（雄の音）といい、低い音は [ŋ uə n2Me6]（雌の音）という。祭りや銅鼓の競技の中では、必ず雄と雌を組み合わせで闘う。そうやって初めて靈驗あらたかな美しい音が現れると信じられている。壮族の「波那七」は原始哲学と思惟、美意識によってもたらされたものである。壮族の「波那七」は、自然界に存在する二元性の客体とみなされ、「波那七」の二元性をもって世界を認識し、世界は一对であるという考え方を表している。これは元来ある生物学の両性の意味ではない。壮族の万物の「波那七」の観念は、原始哲学、思惟であり、彝族（イ族）の万物雌雄の観とも似ている。漢民族の万物陰陽観念とも似ている。違うのは後者が抽象的な概念であり、壮族は形象性を持つ類比観念であり、独特な特性を持っていることである。

## 8 歡敢 [fu ə n1ka: m3]（岩洞歌）と歡婭圭 [fu ə n1ja6kve3]（蛙婆歌）を代表とする歌謡文化

壮族先住民は、歌を好み、歌に長けていると知られていた。春秋戦国時代甌駱民族の歌謡は、その独特な形式、旋律の特徴によって知られていた。漢・劉向撰『説苑』「善説篇」には、楚国の令尹鄂という君子が湖に舟を浮かべて「越人歌」を鑑賞することが記されている<sup>[79]</sup>。壮族言語学者の韋慶穩氏による壮族先住民歌謡の翻訳・考証によると、歌の歌い始めの「今日の夕は何の夕だ。舟を河に浮かべて、舟に乗る」という文句は、現在の広西北部壮族の伝統的な夜の歌でよく使う「興情歌」の詩句「ham6ni4ham6ka5ma2? fei2a1tok7lon 20 u 3」（「今日の夜は何の夜だ。鳥が火をくわえて屋敷にやってくる」）という歌詞と非常に似ている。これによって壮族の民謡と先祖の越人が深い関係にあることがうかが

える。そしてさらに清・李調元撰『南越筆記』には、次のように書かれている。「粵（越）の風俗では歌を好む」、「粵（越）の歌は榜人（舟人）の女から始まった」とある。それは先の令尹鄂の越人の歌の中に書かれている「榜柁越人女子（舟歌を歌う越人の女）」を指している。

また游国恩の『楚辞の起源』の考証によれば、「この越人の歌の歌われた時期は、おそらく楚康王五十五年の間のことであろう。紀元前550年ごろに作られたものとする」とある。それは屈原が生活している頃の襄王の時代より古い。紀元前6世紀の作品である。『詩経』の作品の時代のもっとも新しいものと近い。越人の歌唱力は、先秦時代にはすでに広く知られており、絶賛する記録があちこちに見られる。例えば『漢書』の「元后伝」には、成都侯の王商が長安城を穿ち、内澧水を私邸に引かせ、大きな堤防に船を曳き、船の中に羽蓋を立て、楫を取る越人に越の歌を歌わせたという記録が残されている<sup>[80]</sup>。長安に住む貴族にとって越の歌を鑑賞することは、当時の流行であった。

略越の末裔である壮族は、「古越人は越の声を重んずる」という風習を伝承してきた。彼らは「幼いころから歌を習い」、村々で歌を掛け合うのが習いとなった。「すべて即興、そして自分で作る」。しかも定期的に歌掛けをすることで、歌謡文化は非常に発達している。これによって氏族集落時代の集団的な祭りや、部族外の複数地への通い婚制度から、決まった配偶者婚制度への過渡期であることがわかる。それは現存する二種類の古い歌の形式から、その面影を窺うことができる。一つは「歛敢」[fu ə n1ka: m3]といい、「歛」は山歌、「敢」は岩の洞窟である。つまり「歛敢」は、岩窟の歌となる。現在右江流域広西田東県にある仰岩と田陽県の「敢壮」（穴に住む壮族）は、昔から毎年数万人以上の人が集まり、岩窟で歌掛けをする。有名な壮族の伝統的な長篇「排歌」は、「歛敢」と「歛嘹」[fu ə n1li: u2]（漢語訳「嘹歌」。すでに現代語版のものが出版されている）であるが、この種の歌掛けは古代壮族先住民から起源し、「山洞に随って居住す（『隋書』「南蛮伝）」、「岩穴を以て住み止まる（宋・樂史撰『太平寰宇記』）」と記録されている。岩の洞窟を崇拜して、「敢卡」神を祀る伝統がある。「敢卡」[ka: m3ka1]の壮

語のもともとの意味は、「股の間の岩穴」を意味している（女陰を比喻している）。訳して子育ての女神としている。明らかに「歓敢」と「歓瞭」は、母系社会の自然崇拜と生殖崇拜から生まれた産物である。歌謡形式は、時代とともに変化しつつ、現在は恋歌を中心とする伝統の形式となっている。

もう一つは「歓婭圭」[fu ə n1ja6kve3] 形式の歌がある。「歓」は山歌の意であり、「婭圭」は蛙のお婆さん、俗称でカエルをいう。「歓婭圭」は、すなわち「蛙婆歌」であり、紅水河流域の蛙祭りの中で歌われる「勒脚歌」<sup>[81]</sup>の儀式歌である。蛙祭りは事実上、氏族集落が蛙のトーテムを祀ることによって気候が順調であること、五穀豊穡を祈る祭りである。宗教的な祭りは、盛大な儀式を行うため、一つの集落、あるいは複数の集落の人が一堂に会して歌を歌い、舞を舞う。若い男女には配偶者を選ぶ機会が提供される。

一方では、儀式的歌を歌うことによって、民族の歴史、生産生活、倫理道德などの知識を伝える。もう一方では歌掛けを通して才能を比べ、気持を伝え、また友情を語り、縁結びをする。このような歌掛けは、後世になってほしいに男女の歌掛けを主題とする「墟蓬」[hu 1fan 2] となる。意味は楽しい場で、漢語では「歌墟」と呼んでいる<sup>[82]</sup>。

## 9 「依托 [ju lto3]（土医、土薬）」－特色ある医薬文化

壮族の先住民は、労働と生活の中で病気と闘った経験に基づいて、独自の地域・民族性を持つ伝統的医薬体系を形成した。壮語で「依托 [ju lto3]（土医、土薬）」という。「依」[ju 1] は医と薬、「托」[to3] は本地、土着の意味で、訳して土医、土薬である。薬は自然から採取し、医術はおもに針の治療を行うことで有名である。

新石器時代に入り、甌略の先住民地域では焼き物文化が発達し、「陶針」治療がつつぎと生み出されていった。戦国時代にはかなり流行し、漢方医の「九針」の形成に対して明らかな影響を与えている。現存する「壮医」の陶針の考証によると、その針は漢方九針の最初といわれている「鑱針」と極めて似ている。壮医

の陶針はいまだに民間では使われている。考古学者は、広西武鳴県馬頭郷の西周時代の古墳から二針の精巧な青銅で作った針を見つけた。調べによれば、これは壮族先住民の針治療の道具である。『内経』(黄帝内経)には「古い九針は、また南方より来る」という記述があり、甌駱地域は針を刺す療法と九針の発祥地の一つである。2000年の間に、壮族先住民は高い技術の針を製造する技術を持っただけでなく、全体から見るとその針を刺す療法と壮医の技術レベルは、かなり先端に位置する。壮医は、痧(暑気あたり)、コレラ、マラリア、毒虫などの毒気、リウマチなどの病状の治療には特に優れている。また毒をもって毒を制し、解毒する。そして内臓の病気を外側から治療するなどの方法を使う。そのような高い技術力を持ちながら、理論上の体系は初歩的形成に留まっている。

### 【注】

- 【1】熊本学園大学講師・熊本県立大学講師。文学博士。中国広西壮族自治区出身。
- 【2】[Zhuàng zú]壮族(壮文:Bouxraeuz, 英文:Bourau ベトナム語:Tày-Nùng)、中国における人口最多の少数民族で、2010年の第6回全国人口調査では、1854万人がいた。主に広西壮族自治区・広東省・雲南省にいる。
- 【3】Tonkin湾。Vinh Bac-bo。中国ではベイプー(北部)湾。
- 【4】撞 Zhuàng 「壮族」の古称の一つ。出典不詳。
- 【5】僮 Zhuàng 古くから僮・獯と表記されたが、1965年「壮族」となった。『明史』巻45「地理志六」(福建・広東・広西篇)には「柳州府・洛容。正徳時、爲瑤、僮所據」と、明代の正徳(1506~1521)年間、広西・柳州府は、瑤族と僮族によって占められていたと記す。また清代から「獯人」とも呼ばれ、清・陸次雲撰『峒溪織志』「獯人」の条には「獯人居五嶺以南」と、五嶺の南に「獯人」が居住しているとの記述がある。
- 【6】珠江は河の名で、中国で三番目に大きな河川であるが、総流量で計算すると、全国二番目である。全長2400kmで、雲南省の東境から発し、貴州省・広西壮族自治区・湖南省・江西省等を経て、最後広州から南シナ海に注ぐ。その名の由来は清・顧祖禹撰『讀史方輿紀要』「広東二・広州府」によると、「江中有海珠石、是曰珠江」と、珠江の中州に「海珠」という名の

- 石があるため、珠江と呼ばれていた。主に西江（2197km）、北江（468km）と東江（523km）の三つの川の流域、及び河口の珠江デルタから形成され、ベトナムの一部を含めて「珠江流域」と称す。南方内陸の水路網として発達している。
- 【7】五嶺は湖南省衡山から東海に至るまでの山系である。『太平御覧』「地部」〈嶺〉には「廣州記曰、有五嶺。大庾嶺・始安嶺・臨賀嶺・桂陽嶺・揭陽嶺」とある。古来五嶺山脈は地理的に天然のよう壁となっているため、北と南の往来の妨げとなる。「南嶺」とも呼んだ。又五嶺より南の地域は「嶺南」と呼ぶ。
- 【8】hand ax. 最初フランスではクードポアncoup-de-poingと呼ばれる。握斧。先端は尖り、両側は刃部、基部は手の中に握るため半円状をしている。
- 【9】1958年広東省韶関市馬壩の石灰洞穴から発掘された化石人類の頭骨。旧石器時代中期のものとしてされる。シナントロプスよりも頭蓋が高く、中国における旧人類の段階を代表するものと考えられている。
- 【10】広西・来賓市麒麟山の洞窟で発見されたため、麒麟山人と名付けられた。1956年1月14日、中国科学院古脊椎動物研究チームにより、来賓市興賓区にて頭穴、上顎骨と口蓋骨の大部分を含む頭蓋基部の人骨が発見された。36000年前、旧石器時代後期の古代人類、壮族の先祖として識別された。
- 【11】桂林甑皮岩人類洞穴遺跡は、桂林市南部に位置する象山区の独山西南麓にある。約12000～7000年前の遺跡である。1965年に発見され、1973年と2001年に二度にわたって発掘調査が行われた。数千万件の石器・骨器・蚌器・角器・牙器等が発見され、中国最古の陶器と新石器時代の洞窟遺跡の中に、最古の石器加工場もあった。32個の墳墓も発見され、そのうちの多くは屈肢蹲葬の人体が埋葬されていた。「華南及び東南アジア有史以前の考古史上、最も重要な指標と資料庫倉」とされている。
- 【12】頂嶺山遺跡は、広西・邕寧県にある新石器時代晩期の貝塚古墳である。総面積5000㎡の中で、331箇所の古墳があり、400あまりの人骨や石器、骨器、陶器等が出土した。年代は8000年～7000年前後のもので、1996年に発掘された。又5000年～10000年前の居住地も発見された。
- 【13】近年広西・南寧市の周辺で、考古学者たちの手により石製のカンナが300個あまり発掘された。およそ4000年以上前の新石器時代晩期のもので、稲作文化との関わりがあるとされた。

それらは広西壮族自治区・広東・海南島およびベトナム北部地域を中心に発現されたため、この地域は「大石鏟文化圏」と称される。その上最新の研究結果によると、広西壮族自治区は古くから稲作の資源が豊富な地域であり、未だに野生稲の資源もあるため、中国の稲作文化の起源と分布においても、重要な研究対象地域である。石鏟は大きさから言っても、農作業に不向きで、古代祭祀の道具であろう。

【14】ここでの「君」は領地・領民を持つ者の称。「将」は軍隊を率いる人。

【15】西甌は、古代広西北部地域で暮らしていた部族。『史記』巻113「南越尉佗列伝」には「佗因此以兵威辺、財物賂。遺閩越・西甌・駱役属焉」とあり、史記索隠注は「交趾・九真二郡即甌駱也」とする。秦と西甌の戦いは「秦甌戦争」とも呼ぶ。『淮南子』巻18「人間訓」によると、「三年不解甲弛弩、使監祿無以轉餉。又以卒鑿渠而通糧道、以與越人戦、殺西嘔君譚吁宋。而越人皆入叢薄中、與禽獸處、莫肯為秦虜。相置桀駿以為將、而夜攻秦人、大破之、殺尉屠睢。伏屍流血數十萬」とある。西甌はまた西嘔とも書き、通音字である。

【16】羈縻（きび）制度は、中国の唐代から諸王朝が外族内部の行政組織をそのままにして外族を統御する伝統的政策をいう。別に羈縻州制度とも称される。唐代、中央政権が各地域の少数民族に対して行なった融和政策。一般の行政区画と異なる管理機構で、少数民族地域だけに置かれた。その民族習慣に従って管理する制度である。『新唐書』巻43「地理志下・羈縻州」には、「唐興初、未暇於四夷。自太宗平突厥、西北諸藩及蛮夷、稍稍内属、即其部落列置州县。其大者為都督府、以其首領以都督刺史、皆得世襲。雖貢賦版籍、多不上戸部、然声教暨皆邊州都督都護所領。(中略)大凡府州八百五十六、号為羈縻云」とある。

【17】土司制度は、中国、元代以後、民国時代まで、少数民族の族長で世襲の官爵を与えられた者、またはそのような制度をいう。西南地域は古くから山岳民族が居住していたが、これら諸民族に対して中国の政治力はほとんど及ばなかった。元代になってこれらの地方を統治するために首長に政府から官職を授け、その慣習に従って自治を行なうことを許した。この官職を土司（土官）と呼び、その地位は世襲を許された。『元史』巻91「百官志七」には、「諸蛮夷長官司、西南夷諸溪洞各置長官司、秩如下州。(中略) 参用其土人」とある。明代には土司制度は完成し、清朝もこれを受継いだ。『明史』巻317「広西土司一」には、「正統四年（1444）奏、本府所轄東蘭等三州、土官所治。歷年以來、地方寧靖。宜山等六県、流官所治。洞溪諸蛮、

不時出沒」とある。

- 【18】桂系とは中華民国時代における南方軍閥の一つ。旧広西派ともいう。桂系派は陸榮廷らが率いた旧桂系派と、李宗仁、白崇禧などが率いた新桂系派に分けられる。中華民国の設立後、旧桂系派は中国の最も強力な軍閥の1つとして機能した。軍閥は隣接している湖南と広東省を支配し、陸榮廷は雲南派と共に護国戦争の間、袁世凱の皇帝即位に反旗を翻した。雲南省と孫文の中華革命党と共に護法運動を開始したが、すぐに孫文と意見が対立し、陳炯明率いる粵軍（広東軍）が、旧広西派への攻撃を開始し両広戦争が勃発した。旧桂系派は孫文、陳炯明、および雲南派に破れ消滅し、1920年代前半に李宗仁、白崇禧らの新桂系派に取って代わられた。
- 【19】華夏は中国人が自国を誇っている言葉。元々は中原地域を指す。つまり黄河流域の中原あたりを中国人の起源とするが、次第に全国土をいうようになった。『三国志』「蜀志・関羽伝」には「羽威震華夏、曹公議徙許都、以避其銳」とある。
- 【20】秦の時趙佗は桂林郡と象郡を合わせて建国し、南越王と称した。『史記』卷113「南越尉趙佗伝」には「以謫徙民、與越雜處十三歲。佗秦時用爲南海龍川令」とあり、また「秦已破滅、佗即擊並桂林・象郡、自立爲南越武王。（中略）漢十一年、遣陸賈因立佗爲南越王。與剖符通使、和集（輯の通音字）百越」とある。
- 【21】呂嘉は越族人の首領で、もともと漢代南越国の丞相。司馬遷『史記』卷113「南越尉趙佗伝」には「（漢・元鼎四年）於是天子許之、賜其丞相呂嘉銀印及内史中尉大傅印、餘得自置。除其故黥劓刑、用漢法。（中略）其相呂嘉年長矣、其居國中甚重、越人信之、多为耳目者。得众心愈于王、王之上書、数諫止王、王弗聽。有畔心、数称病不見漢使者。使者皆注意嘉勢、未能誅王。（中略）入越境呂嘉等乃遂反」と、漢帝の許可のもとで、その丞相である呂嘉は、銀印及び内史・中尉・大傅等の印を持ち、南越国を自治するようになった。南越の古い風習黥劓刑を残す以外、皆漢の法律を使用した。しかし次第に呂氏の宗族を南越の王室と婚姻関係を持たせ、自から南越王と名乗るようになった。
- 【22】紀元前140～紀元前87在位。漢の孝武帝。名は徹。匈奴を討伐し、西域・安南・朝鮮を侵略し、儒教を政治・教化のもととした。
- 【23】『史記』卷113「南越尉趙佗伝」によると、「元鼎六年冬、（楼船將軍）以数万人待伏波（中略）城中皆降伏波。呂嘉建德已夜與其属数百人亡、入海以船西去。伏波又因問所得降者貴人、以知

- 呂嘉所之、遣人追之…」と、漢武帝は伏波將軍を派遣して、呂嘉等の反乱を打ち破ったという。さらに『漢書』巻95「西南夷兩粵伝」には「諭告甌駱四十餘万口降。(中略)南越已平、遂以其地爲儋耳、珠崖、南海、蒼梧、鬱林、合浦、交趾、九真、日南九郡」と、伏波將軍・馬援は、南越に儋耳、珠崖、南海、蒼梧、鬱林、合浦、交趾、九真、日南という九郡を新たに設けた。
- 【24】馬援は扶風茂陵人で、漢武帝の時(紀元前14～紀元後25年)に活躍した將軍である。伏波將軍・樓船將軍ともいう。匈奴、西羌等を打ち破り、交趾(今のベトナム)の徴側、徴貳姉妹の乱を平定した。
- 【25】『後漢書』巻54「馬援伝」には「援將樓船大小二千餘艘、戰士二万餘人(中略)援所過輒爲郡県、治城郭、穿渠灌溉、以利其民。条奏越律與漢律、駁者十餘事。與越人申明旧制、以約束之」とある。
- 【26】采邑は古代士大夫の封地を指す。もともとは漢代の君主から卿大夫達に与えられる美田をいう。ここでは土地、人民は現地の少数民族の首長が所有すること。
- 【27】東方家族奴隸制とは、ソ連史学において、アジア的生産様式論を駆逐するために作られた造語であり、アジア的生産様式に見えるものは、奴隸制のアジア的変種であり、古代アジア奴隸制の特徴であるとするものである。古代の奴隸制を成熟した奴隸制とみる観点から、初期奴隸制と呼ばれることもある。
- 【28】狄青は北宋の武將。『宋史』290「狄青伝」には「狄青、字漢臣。汾州西河人、善騎射。初隸。(中略)皇祐中、広源州蛮・農智高反、陷邕州。又破沿江九州、圍広州。嶺外騷動(中略)青上表請行。翌日入对自言、臣起行伍、非戰伐無以報国。願得蕃落。(中略)擒賊五百餘人、智高夜縱火烧城遁去。遲明青按兵入城…還至京師、帝嘉其功、拜樞密使、賜第」とある。皇祐三年(1053)広源州蛮・農智高寇が邕州で反乱を起こし、すぐに宋軍の將軍狄青の出兵によって捉えた。
- 【29】元代以後、中華民国時代まで、西南地方に置かれた地方官制度。土司制度と同じ。中央政府から諸少数民族の長に、ある種の官職を授け、従来の慣習に従い土民の統治を許した。『元史』巻26「仁宗紀三」によると、「雲南土官病故、子姪兄弟襲之。無則妻承夫職」と、雲南の土官は病気で亡くなると、子、姪、兄弟がそれを世襲できる。男系の継承者がいない場合は、妻が夫の職を受け継ぐことができるとあり、世襲制であることが分かる。
- 【30】宋代以後、西南少数民族地域に置かれた羈縻州の管轄下の行政単位である。「知州」、「權

- 州]、「監州]、「知峒]ともに、地方の県・州に置かれた長官の官名。「知州]は州の長官で、これまでの節度使が支配していた州に、中央から文官を派遣したのがそのはじまりである。「權州]は唐以後代理官と試し官を指す。「監州]は通判という官の別名で、地方行政を監督する。「知峒]は、知は郡県州の全ての仕事を管理する長官を指し、「峒]は「峒]「洞]とも書く。『宋史』卷43「蛮夷伝]三「撫水州]に「平州初隸融州、亦羈縻州。峒也]とある。また宋・范成大撰（1175年）『桂海虞衡志』卷十三「志蛮篇]に「自唐以来、（中略）不可尽以中国教法繩治、姑羈縻之而已。有知州、權州、監州、知峒、知洞]と解説がある。
- 【31】「文帖]は役所の公文書であり、「朱記]は宋代の官印の一種である。『宋史』卷154「輿服志六]「印]には、「景德初、別鑄兩京奉使印。又有朱記、以給京城及外処職司、及諸軍將校等、其制長一寸十分、広一寸六分]と説明がある。また宋・范成大撰『桂海虞衡志]佚文「羈縻州洞篇]には「有知州、權州、監州、知峒、知洞。皆命于安撫、若監司給朱記文帖]とある。
- 【32】「波那 [pa6na2]」または以下の（「召那 [Kjau3na2]」「勒那 [Luok8na2]」）等は、壮族語の発音を漢字やローマ字で表記する記号である。
- 【33】達魯花赤は、モンゴル帝国の官職。管轄する地方の官印を保管し、徴税などの財政、戸口調査、治安、軍政、駅伝、運輸等の職務を管掌する。一般的に、漢民族は正の官職を担当することが許されず、モンゴル人・色目人（トルコ・イランなどの西域地方諸民族）等によって担当された。『元史』卷6「世祖紀三]には「以蒙古人充各路達魯花赤、漢人充総管、回回人充同知、永爲定制]とある。
- 【34】景泰『雲南圖經志書』卷七にある李京の「越崑元日]詩には、「雞人唱罷曉沉沉、仙杖遙分翠殿深。（中略）普天率土皆臣妾、航海梯山總照臨]とある。
- 【35】「土千戸所]と「土百戸所]は、元代の兵制である。『元史』卷99「兵志二]〈鎮戍]に、「安西王相府言、川蜀即平、城邑山寨洞穴凡八十三所、其渠州礼義城等処凡三十三所、宜以兵鎮守。（中略）凡千戸守一郡、即率其麾下從之。百戸亦然]とあり、西南の辺境を守るために、千戸・百戸制度を定めた事が分かる。同じく『元史』卷91「百官志七]にも、「上千戸所、管軍七百之上。達魯花赤一員・千戸一員。俱從四品、金牌。（中略）上百戸所、百戸一員・蒙古一員・漢人一員、俱從六品、銀牌]と記されている。
- 【36】巡檢司は明の時、西南部少数民族に与えられた武官の官名である。「土]は地方の意である。

- 『明史』巻75「職官志四」に「巡檢司、巡檢、副巡檢。俱從九品（中略）初洪武二年、以広西地接瑤・僮、始於閔隘衝要之處、設巡檢司、以警奸盜。後遂增置各處」とある。明の洪武二年に、広西地方の瑤・僮に接する閔隘衝要の処に、巡檢司を設置し、以て奸盜を警戒した。
- 【37】改土帰流とは明以後、南西部に住む少数民族に対する政策をいう。改土帰流は土司、土官を改め、流官(朝廷任命の正式官吏)とする意。古くは中原の文化の及ばない、いわゆる化外の民として放置された少数民族は、元代以来その土着民を土司、土官とする間接統治にゆだねられていた。その土司制度を廃止し、中央政府直轄の州県制に転換させ、科挙に合格して選抜された「流官」を派遣して直接統治するなど一連の制度転換である。『明史』巻312「四川土司二」には「十九年、(貴州巡撫叶) 夢熊主議、播州所轄五司改土爲流、悉属重慶」とある。
- 【38】『漢書』巻95「西南夷两粵朝鮮伝」には、漢昭帝の始元5年(公元前82年)の記事として、「鉤町(同句町)侯亡波率其邑君長人民擊反者、斬首捕虜有功。立其亡波爲鉤町王」とあり、句町国の創立を記している。又同伝には「王莽篡位、改漢制。貶鉤町王以爲侯。王邯怨恨、牂牁大尹周钦詐殺邯。邯弟承、攻殺欽州郡。擊之不能服、三辺蛮夷愁擾尽反。復殺益州大尹程隆」とあり、前漢末期に王莽が政権を奪い、句町王を侯に貶したため、不満を持っていた王邯が造反蜂起をしたことが記されている。
- 【39】『後漢書』巻116「南蛮西南夷伝」〈南蛮篇〉には、「礼記称南方曰蛮雕題・交趾、其俗男女同川而浴(中略)今烏潯人是也。(注、万震南州異物志曰、烏潯地名也。在広州之南、交州之北)」とある。烏潯人は壮族の先祖である。後漢の烏潯人の暴動については、同書同巻に「光和元年(178年)、交趾合浦烏潯蛮反叛」と記録する。
- 【40】『新唐書』巻222「南蛮伝下」〈西原僚〉には、「西原僚居広容之南、邕桂之西(中略)西接南詔。至徳初、首領黄乾曜(中略、等諸)洞蛮皆叛。(中略)攻桂管十八州。所至焚盧舍、掠士女、更四歳不能平(中略)遣中使慰曉諸首領賜詔書、赦其罪、約降(中略)斬黄乾曜…」とある。広容の南、邕桂の西に住む西原僚(壮族の古称)は、至徳(583年)初め、首領の黄乾曜氏が諸洞蛮を率いて叛乱をおこした。唐代嶺南地域における最大級、しかも最長期の少数民族・西原僚人黄乾曜(?年～760年・壮族人)等七人による蜂起運動である。
- 【41】區希范(?-1045年)、北宋・環州思恩県(今広西壮族自治区環江毛南族自治县)の人。『宋史』巻496「蛮夷伝」〈環州蛮・區氏〉に「環州蛮區氏、州隸宜州羈縻領思恩・都毫二県。

有區希范者、思恩人也。狡黠頗知書（中略）與其叔正辞応募從官軍討安化州叛蛮（中略）正辞率其族人及白崖山酋蒙趕、荔波峒蛮謀爲亂（中略）白崖山酋蒙趕爲帝、正辞爲奉天開建建国柱王、希范爲神武定国令公」とある。宋・景佑五年（1038年）に區氏叔姪二人が中心となって、中央政権に対する不満から反乱を起こした。區氏一族を率いて、荔波洞蛮夷とともに反朝廷運動を起こした。白崖の山酋・蒙趕に帝王を薦め、叔父の正辞は奉天開建建国柱王とし、區希范は神武定国令公とした。

【42】前出注28参照。広源州蛮・儂智高（ヌン・チーガオ）、壮語でNungz Cigaoh。壮族の民族英雄で、1025年～1055年頃は、北宋の反乱の指導者である。

【43】『明史』巻317「広西土司一」には、韋銀豹と古田八寨暴動が詳細に記録されている。「初桂林、古田僮種甚多。最強者曰韋章（中略）時韋銀豹與其從父朝猛、攻陷洛容峒、據古田。分其上、下六里。銀豹出掠、挾下六里人行、而上六里不與焉。五年提督吳桂芳因其間、遣典史廖元入上六里撫諭之。諸僮者復業者二千人、銀豹勢孤請降。（中略）既而生縛銀豹、並其子扶枝膠送京師、斬之。古田平、乃並八寨與龍哈、啼咳爲十寨。立長官司、以黃昌等爲長官土舍。聽守御調度。（中略）万歴六年（1578）斬首四万人百余級、嶺表悉平」とある。桂林古田の僮（壮族）韋銀豹は、嘉靖年間（1522～1566）その叔父朝猛と共に暴動を起し、古田に拠点を据え、屢々官吏を殺した。

【44】清の末年に広東・広西中心に起こった反乱。指揮者の洪秀全は、広東花县人。太平天国運動の首領である。キリスト教を信仰し、道光末（1850年）広西より起こし、馮雲山等に従い、自ら天王と称した。太平天国を建号し、頻りに制度・律令を定め、屢々清軍を敗れさせた。しかし後に諸将が権を争って弑殺するに至ったが、それに乗じた曾国荃等に囲まれて、自殺した。凡そ十五年にして亡ぶ。

【45】1954年9月20日に、中華人民共和国の第一回全国人民大会で、中華人民共和国憲法を通過し、中央人民政府が正式に公布した民族平等という政策を押し進めるように定めた。全国の各少数民族対して自治の権利や民族区域自治等の規定を明確に打ち出した。

【46】1952年に中央人民政府が『民族区域自治実施綱要』を公布した。主な内容は、国家の統一指導のもとで、少数民族の聚集地を単位とし、民族自治区を設立する。またそれと対応するための行政機関を設け、自治権を実行する。中国民族自治地方において、それぞれの行政区に合わせて自治区・自治州・自治県を設立する。その政策に応じて1958年3月5日に、全国

二番目の自治区として広西僮族自治区が正式に設立され、自治区の首府は南寧とされた。さらに1965年に差別のないようにと、広西壮族自治区と改名された。

【47】郷は、中国の行政単位の一つ。県の下に位置する行政単位で、ひとつまたはいくつかの村落を合わせたもの。民族郷は少数民族の自治に任せられる特別の郷である。

【48】前出注15参照。

【49】嶺南（南嶺とも言う）は五嶺より南の地方のことをいう。古くはベトナムの北部をも含む。百越文化圏とも呼ぶ。百越は「百粵」とも書く。「周代までに、今の浙江省南部から福建・広東・広西壮族自治区の各地域にいた様々の先住民の総称（小川環樹等編角川『新字源』）」。現在「百越」という国は存在しないが、その子孫（様々な越人）は主に中国西南部の各少数民族として、上記の各省・自治区に、また南太平洋諸島、フィリピン南部・インドネシアやマレーシアの南部・東南アジアのメコン川流域・台湾・琉球諸島・朝鮮半島等の地域に暮らしていると考えられる（『百越文化圏における卵生説話の源流考——龍母伝説を中心に——』）

【50】意志と行動が矛盾していることのとえ。「輾」は前進する方向に向けられるかじ棒のこと。「轍」は車輪の跡のこと。かじ棒は南を向いているにもかかわらず、車輪の跡は北向きに付いているという意味から。

【51】祭祀者が壮語の記録のために、漢字をそのまま利用し、漢字の六書構字法を使って作り出した。形が漢字と同じく四角い枠に入るので、方塊壮字（ほうかい壮字）とも呼ばれる。宋・周去非撰『嶺外代答』巻4「風土門」俗字の条に詳しい。造字が多く、省略する。

【52】北魏 酈道元（?～527年）撰『水经注』巻37「叶榆河」の条には「交州外域記曰、交趾昔未有郡県之時、土地有雒田。其田従潮水上下、民垦食其田、因名爲雒民」と、交趾には雒田があり、雒田の苗は海の潮水に従って上下し、雒民がそれを開墾して生活の源としているという。この地域は古くから「雒田」に海水稻を育てていたことが分かる。海水稻については、清・屈大均『広東新語』巻2「沙田」の条にも「広州辺海諸県、皆有沙田（中略）五曰潮田、潮漫汐乾、汐乾而禾苗乃見」とある。「潮田」は潮の満ち引きに合わせて、稲の苗が現れるという。

「雒田」に関しては、石鐘健は「雒田が正しく、古代百越の駱越族の稲作方法の一つである。雒は駱・貉とも書き、通音字である」と指摘した（『百越民族史論集』所収石鐘健「試論越與駱越出自同源」百越民族史研究会編 中国社会科学出版1982年2月）。「雒」「駱」「貉」は、

- いずれも「LOU」と発音する。また古注『史記』巻113「南越尉佗伝」の「佗因此以兵威辺、財物賂遺閩越・西甌・駱役属焉」の一文にある「駱」に対して、南北朝・裴駰の集解注は「漢書音義曰、駱、越也」と注釈している。その後、唐・司馬貞の索隱注にも「駱田」とあり、姚氏案広州記云の「交趾有駱田、仰潮水上下。人食其田、名爲駱侯。諸県自名爲駱将、铜印青绶」を引用している。
- [53] 双肩石斧は新石器時代の石器である。広西紅水河流域に発見された化石で、長さ 7.1 cm、幅 4.6 cm、幅 5.3 cmの二つの肩がついているもので、南方稲作の「那」文化圏に多く出土される。
- [54] 邕江、川の名。現在広西壮族自治区南部を貫く大きな河川で、珠江水系西江支流のひとつである。全長133.8キロメートル、流域面積は6120平方キロメートルである。その上流は右江であり、区都・南寧市内を流れる川は邕江といい、下流の梧州では西江といい、広州では珠江と合流し、南海に注ぐ。「邕」は『旧唐書』巻41「地理志」〈嶺南道〉に見られる。「邕管十州、在桂府西南（中略）貞観六年（632）改爲邕州都督府」とある。
- [55] 「干欄」は高床構造の建物をさす。高床式住居のこと。また「干欄屋」「高脚屋」「吊脚楼」「棚屋」ともいう。今から6000～7000年前とされる浙江省の河姆渡遺跡から各種の柄（ほぞ）、柄穴を加工した木造部材が出土した。これらを始めとして、同種の遺跡は新石器時代から歴史時代まで、干欄文化は浙江、江蘇、湖北、雲南省などで発見されている。中国の西南少数民族地域を中心に、東南アジア、マダガスカル、台湾等の地域でよく見かけられる。日本の神社や穀物の倉等もその作りが多い。主な特徴は竹や木造で上下二段式に建てられ、上は人間が住み、農作物の倉庫とし、下は家畜の小屋となる。階段で上り下りする。亜熱帯地域に特有な湿気、暑さやまた爬虫類・獣の加害をも防ぐ事ができる。地域により、水上生活者の家屋は水中や河川の岸辺の水上に立てられる事もある。香港周辺に多く分布している。
- [56] 『魏書』に記載がある。北齊の文宣帝の勅命により魏収が中心となって編纂。紀元554年に完成。巻100「僚伝」には「僚者蓋南蛮之別種。自漢中達於邛笮山洞之間、所在皆有種類甚多。散居山谷（中略）依樹積木以居、其上名曰干蘭。干蘭大小隨其家口之数」とある。
- [57] 『漢書』巻29「地理志下」には、越地は「処近海、多犀・象・毒冒・珠璣・銀・銅・果物・布之湊」と、近海にはたくさんの犀・象牙・玳瑁・珠璣・銀・銅・果物・布の貿易港がある

と記されている。その師古注には「布謂諸雜細布皆是也」とある。

- 【58】『爾雅』巻8「釈草」篇には、「卉、草。舎人曰：凡百草一名卉。知卉服是草服、葛越也。葛越、南方布名、用葛爲之」とある。また宋・周去非撰『嶺外代答』巻6「服容門」には、「广西觸処富有苧麻、觸処善織布。柳布、象布、商人貿遷而聞於四方者也」とあり、广西の至る処、苧麻が豊富で、民は布を織るのが上手く、柳布、象布等はすべて商人の交易によってあちこちにその名を知られるようになったと記す。
- 【59】『尚書』巻6「禹貢篇」〈楊州〉の条「島夷卉服、厥篚織貝」（島夷は花卉を服し、厥の篚を織り貝とし）の本文に対して、漢・孔安国の古注では「南海島夷、草服葛越」とある。南海の蛮夷は草や葛等で服を作るのだと解釈し、さらに注として「鄭玄云、此州下湿、故衣草服。貢其服者、以給天子之官」と、湿気が多い南海地域では草製の服を着るとしている。天子はその服を献上する者には朝廷の役人として任命するとの記述がある。
- 【60】紅水河は、広西壮族自治区の北西部に流れる大河で、西江の別名。珠江水系の主流である。その源は上流の雲南省の南盤江であり、途中で貴州省の北盤江と合流すると紅水河と呼ばれる。下流では自治区の中部都市柳州で柳江と合流し、黔江と呼ばれる。その後、郁江・潯江等と合流し、梧州で西江として広東省に横切り、最後広州市で南シナ海に注ぐ。全長638キロメートル、流域面積は3.32万平方キロメートルであり、河の流域には鉄分の高い紅土のため、川水は赤色である。それで「紅水河」と呼ばれている。
- 【61】蛙祭りのこと。広西壮族自治区北西部の東蘭・南丹・天峨等の壮族地方では、毎年旧正月に行われる「蛙婆節」という祭りがある。「青蛙節」とも言う。新年の豊作・無病息災を祈るための伝統的な祭りである。壮族の神話、伝説によると「蛙はもともと雷神の息子である。天帝の発意による派遣のため、人間界に降りてきて、農作物作りの手伝いをした。しかし愚かな人間によって殺されてしまった。天帝は怒った。人間に対して、死んだ蛙を探し出し、礼拝をしなければ、許さない。しかも手厚く葬式を行えば、許すと約束した。その後、人間は豊作のために降雨を祈るようになった」という。まつりは旧正月の朔日から月末まで、一か月の間に四回にわたって行事を行う。最初の行事は、元旦に正装した村の若者が田に冬眠中の蛙を捜しに行き（「尋蛙婆」）、見つけると村人は祝うための歌会を開いたり、爆竹を鳴らしたり、大騒ぎで祝う。次の行事は、見つけた二匹の蛙を村の祠堂に運び、巫者による経

- をあげた後に殺す。そして殺した蛙を竹筒で作った棺桶に入れ、その後二人の若者に棺桶を担がせながら、村中一軒一軒を巡遊する。各家から祝福のお礼（糯米、お餅、お金と赤色に染めたゆで卵等）を頂き、経を読む人とともに蛙婆に感謝の気持ちを申しあげる。その後、夜になると、蛙婆のお通夜を行う。村中の老若男女は全員祠堂に集まり、線香を上げ、祈祷をする。これは「祭蛙婆」という。第三の儀式「唱蛙婆」は、最も長く、月末までです。儀式の期間中、夜も明かりをつけたまま、銅鼓を鳴らしながら、歌垣を行い、賑わう。月末になると、最後の行事「葬蛙婆」を行う。村人は風水の良い場所を選び、時間等も厳密に占い、祈祷師が決めた儀式をする。その後、村の長老や祈祷師は先頭に立ち、大勢の村人はそれに続いて、五穀・家畜・虫魚・鳥獣等の絵を描いている幡旗を持ち、太鼓や吹奏楽器を鳴らしながら、厳重な葬式の行列をする。この日は周辺地域の何万の人々が参加し、野山、田畑、川の畔は、すべて祭りの参加者の波に埋め尽くされる。夜になると蛙婆のお墓の周辺では、薪火が燃やされ、銅鼓の音に合わせて、歌を歌ったり、踊りを踊ったり、翌朝まで祭りが続く。
- [62] 歌会は壮族の老若男女が好んで行う歌垣のことである。壮族は歌をよく好み、農閑期や春節・中秋節等の行事において、野外の水辺や山の麓で歌会をする。歌会には、「祭りの歌会」「臨時的・即興的歌会」「競技的歌会」という三種類がある。そのうち最も盛大に行われるのは「三月三」である。広西壮族自治区に住む各少数民族の、伝統的な祝日である。旧暦三月三日に行う。古くは上巳(sì)節とも言い、魏晋以後、上巳節は三月三と改め、代々踏襲している。水辺で宴会を開き、郊外で遊ぶという風習である。壮族の歌会は唐宋時代から記録がある。宋・樂史撰『太平寰宇記』巻163「嶺南道七」〈竇州風俗〉には、「穀熟時、里閭同取戌日爲臘、男女盛装、椎髻徒跣、聚会作歌。悉以高欄爲居、号曰干欄」とある。稲刈り季節になると、村の門を閉じ、戌時（夜七時～九時の間）に男女ともに盛装し、高髪をし、裸足で集まって歌会を行うと記録がある。
- [63] 銅鼓は、銅でつくった太鼓のこと。清・屈大均撰『廣東新語』巻15「貨語・銅」によると、広西右江流域に銅の産地があり、地面を一尺ほど掘ればすぐ銅があると記録されている。故に蛮人は好んで銅器を作るといふ。『後漢書』巻54「馬援伝」には「馬於交趾得駱越銅鼓」の記録があり、その唐・李賢注には「裴氏広州記曰、俚獠鑄銅爲鼓。鼓雅高大爲貴、面闊丈餘。初成懸於庭、剋晨置酒招致同類。來者盈門豪富子女、以金銀爲大釵、執以叩鼓、竟留遺主人也」

とある。後漢時代からすでに幅丈ほどの大きな銅鼓が作られていた。しかも金持ちの象徴として祭儀の時に使われた。

【64】「万家壩型銅鼓」は雲南省楚雄州の万家壩古墳群で出土された銅鼓である。銅鼓の中で最も古いもの（紀元前八世紀～五世紀の春秋戦国時代に作られる）で、銅製の壁が厚く、鼓面には模様もなく、鍋に近い形をしている。その上食物を炊く際の煤が残っていたことから、初期は炊飯のための銅釜と推測される。この初期的かつ作り粗末なものは「万家壩型銅鼓」と呼ばれる。

【65】「世界銅鼓の王様」は、1950年広西壮族自治区北流県六靖鎮の水冲庵で出土されたものである。目下世界中最大の銅鼓であり、「世界銅鼓の王様」と呼ばれている。現在広西壮族自治区民族博物館に展示されている。

【66】銅鼓の高峰期の代表類型「北流型」・「靈山型」・「冷水冲型」とは、嶺南地区における銅鼓文化の三つの最盛期を代表する銅鼓の類型である。凡そ漢代から隋唐までの間に作られたものである。広西壮族自治区の北流県・靈山県と湖南省の冷水冲県等にあるという分布地域は、互いに隣り同士であり、製作の時期も近い。鼓の形やその耳等、模様（蛙・鳥・羽人等）も互いに共通性を持ちながら、独自の特徴も見られる（詳細は農学堅『論北流型・靈山型・冷水冲型銅鼓の相互影響』に参照）。

【67】唐代・劉恂撰『嶺表録異』巻上「銅鼓」の条

【68】『考工記』は中国最古の技術書。車・弓・矢その他の製作法について書かれている。漢武帝の時の『周礼』は、「冬官司空」の部が欠けていたため、『考工記』で補った。現在『周礼』「冬官篇」に「考工記」が見える。

【69】『布洛陀経詩』は明代頃から編輯し続けたもので、壮族民間の口伝による詩歌集である。古代の壮文字で記録され、五言詩の形式で四篇十九章がある。「布洛陀」は壮族の智慧を代表する祖神で、壮語では普遍的で世の中のあらゆる事を知る智慧の老人である。その知恵老人の口伝によって、創世神話を語り、祈願・倫理道徳・文字・歴史等の由来を言い伝えた。西南各地に全部二十二の手抄写本がある。そのうち雲南省文山壮族苗族自治州の古籍管理事務所が蒐集整理した『布洛陀経詩』の伝本の中に、銅鼓の作りに関する記録「銅源詩」がある。

【70】『後漢書』巻54「馬援伝」には「馬於交趾得駱越銅鼓」と記す。

- 【71】『隋書』巻31「地理志下」によると「(諸獠者)並鑄銅爲大鼓(中略)俗好相殺、多構仇怨。欲相攻則鳴其鼓、到者如雲。有鼓者号爲都老、群情推服」とある。諸獠人は銅を鑄り、大鼓となす。お互いに怨むことで戦いが多く、攻めるとき銅鼓を鳴らすと、氏族の人々はみんな雲のように集まってくる。鼓者は〈都老〉と呼ばれる。
- 【72】羅香林(1906年-1978年)は広東出身の歴史学者。民族学や客家学等、中国人種の族譜学の創設者でもある。清華大学史学科で、王国維・陳寅恪等の指導を受けた。主に唐史の中における百越人の源流を巡って専攻した。卒業後、広州の中山大学、暨南大学の教授となり、また香港大学でも教鞭を執った。『古代越族文化考』『客家研究導論』『唐代之光孝寺及桂林磨崖仏像』等日本でも名高い論文がある。
- 【73】花山壁画は広西南部崇左寧明県、左江流域の支流寧明江のほとりにある。戦国秦時代以前から漢代にかけて、西瓯・骆越先住民達の絵画芸術の集大成である。赤い鉱物の顔料を用いた壁画が、長さ172メートル、高さ90あまりの崖壁に残されている。現存図像は1900箇所あり、主に人物・動物・器物の三種類がある。祭事の儀式を表す場面もある。この川沿いの山間にある巨大な壁画は、その規模、勢い、広大さから中国最大級のものとされている。内容の豊富さや保存の良さ、また造形の素朴さと風格のおおらかさで、2016年7月15日世界文化遺産に登録された。
- 【74】『史記』巻12「孝武本紀」に、次のような記事がある。「ある時、漢武帝が泰山奉禪すべきかどうかについて全国の巫官たちに尋ねると、越人の勇之が答えて「是時既滅南越、越人勇之乃言、越人俗信鬼、而其祠皆見鬼、数有效。時東甌王敬鬼神、寿至百六十歳。後世謾忘、故衰耗。乃令越巫立越祝祠、安台無壇、亦祠天神上帝百鬼、而以雞卜。上信之、越祠雞卜始用焉(昔東甌王が鬼神を祭っている時、寿命は百六十歳までであったが、後世は怠慢が原因で老衰した)」と言った」と言う。『史記』巻12「孝武本紀」の割り注には、「雞卜」に関して「正義曰、雞卜法用雞一狗一、生祝願訖、即殺雞狗、煮熟又祭。独取雞兩眼骨、上自有孔。裂似人物形、則吉。不足則凶。今嶺南猶行此法也」とある。唐代に嶺南地域では、すでにこの占い方法が行なわれていたことが記されている。宋・周去非撰『嶺外代答』巻10「志異門」(鶏卜)条にも詳しい。
- 【75】『鶏卜経』は、壮族の鶏卜に関する古い書籍である。広西壮族自治区各地と雲南省文山壮族苗族自治州に流布しているものは33種類あり、現在『壮族鶏卜経影印訳注』が出版されて

いる。(全八巻 広西民族出版社出版 壯学叢書所収2013年)

- 【76】 麼教または魔教は、壯族の師公教とも呼び、史記によれば漢代以前にも「越巫」として存在する。万物神霊、祖霊信仰、占トと蠱術等の多神教で、未熟な信仰とされた。しかし近年漢民族の道教に対する影響は少なくないという指摘もある。經典には「布洛陀經詩」がある。
- 【77】 麼教經書とは、麼經布洛陀のこと。壯族の聖書のようなもので、また壯族古神話集でもある。最初は口伝によるものであったが、明清以後壯族の俗字・方塊字で記録が始まり、抄本が数多く出された。現在は『壯族麼經布洛陀影印訳注』が有名である。
- 【78】 麼教に登場する壯族先住民の、「十二国」と呼ばれる十二種類の動植物等のトーテム信仰のこと。麼經布洛陀には「天下十二国、生出十二王、各国不相同。一国蛟變牛、一国馬蜂紋、一国声如蛙、一国音似羊、一国魚變蛟…」とある。
- 【79】 漢・劉向撰『説苑』卷11「善説」篇「榜枻越人擁楫而歌（中略）鄂君子皙曰、吾不知越歌、子試爲我楚説之。於是乃招越譯、乃楚説之曰「今夕何夕兮、搴舟中流。今夕何夕兮、得與王子同舟。」
- 【80】 『漢書』卷98「元后伝」に「後又穿長安城、引内澧水注第中。大陂以行船、立羽蓋、張周帷、輯濯越歌」という句がある。その顔師古注は「輯與楫同、濯與濯同、皆所以行船也。令執楫濯人爲越歌也（中略）越歌爲越之歌（船に乗り、楫を取る越人に越の歌を歌う）」とある。
- 【81】 「勒脚歌」とは壯族の民歌の形式のひとつであり、主に紅水河流域で多く歌われる。はじめと終りの歌詞を復唱すること。「単勒歌」と「双勒歌」等数十種類の形式がある。
- 【82】 墟は元住居があった場所の意。後に臨時の市場を指す。「歌墟」は臨時の歌合戦の場で、一つの村落、あるいは複数の集落の人が一堂に会して、畑・山間・河川の辺・岩洞で歌を歌い、舞を舞う。若い男女には配偶者を選ぶ機会となる。なお壯族語で「歌墟」は楽しい市を言う。

**【引用文献】**

- 漢・劉向撰、向宗魯校証『說苑校証』（中華書局出版、一九八七年七月）
- 漢・劉安撰『淮南子』（劉文典撰、馮逸・喬華点校『淮南鴻烈集解』、全二冊。中華書局、一九八九年五月）
- 北魏・酈道元撰『水經注』（民国・楊守敬、熊会貞疏。江蘇古籍出版社、一九八九年六月）
- 『史記』『漢書』『後漢書』『魏書』『隋書』『明史』『清史稿』等（『二十五史』所収。上海古籍出版社、一九八六年十二月）
- 唐・劉恂撰『嶺表錄異』（山川風情叢書『南方草木狀』外十二種所収、上海古籍出版社、一九九三年十二月）
- 宋・周去非撰、楊武泉校注『嶺外代答校注』（中華書局出版、一九九九年九月）
- 宋・李昉等勅撰『太平御覽』宋・蜀刊影印本（台湾商務印書館出版、一九八四年八月）
- 清・屈大均撰（一六三〇年生～一六九六年没）『廣東新語』（香港中華書局、一九七四年二月）

**【参考文献】**

- 劉錫蕃『嶺表紀蛮』（アジア民族考古叢刊第五輯、南天書局、一九八七年一月）
- 『百越民族史論集』所収石鐘健氏「試論越與駱越出自同源」等その他論文を参照。（百越民族史研究会編、中国社会科学出版、一九八二年二月）
- 項青『百越文化圏における卵生説話の源流考——龍母伝説を中心に——』『文学・言語学論集』熊本学園大学 第24巻第2号・第25巻第1号合併号 平成三十年六月
- 『地道風物・広西』（中国国家地理 中信出版2015年6月）